

青森県埋蔵文化財調査報告書 第179集

高野川(3)遺跡

平成6年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第179集

こう や がわ
高野川(3)遺跡

—県営農免農道整備事業(高野川地区)に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 6 年 度

青森県教育委員会

序

下北半島には、旧石器時代から歴史時代に至る多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されております。

本報告書は、平成4・5年度に県営農免農道整備事業（高野川地区）の実施に先立って、当該路線内に所在する川内町高野川(3)遺跡を発掘調査した結果をまとめたものであります。今回の調査によって、本遺跡は縄文時代・弥生時代及び中・近世から昭和に至るまで営まれた複合遺跡であることが明らかになりました。特に縄文時代後期十腰内Ⅲ式期の集落跡の発掘調査例は、本県でも数少なく注目されます。

この成果が、今後、埋蔵文化財の保護と活用に役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施から報告書の作成まで、種々、御指導、御協力いただいた関係各位に対して、心から謝意を表します。

平成7年3月

青森県教育委員会

教育長 佐々木 透

例 言

- 1 本書は、平成4年度及び平成5年度に発掘調査を実施した下北郡川内町に所在する高野川(3)遺跡の調査報告書である。
- 2 高野川(3)遺跡の遺跡番号は51029である。
- 3 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記し、その他は文末に記してある。
- 4 挿図の縮尺は、図ごとに示した。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。
- 5 各遺構の規模については、それぞれ最大値を計測した。
- 6 遺跡周辺の地形と地質についての執筆及び出土した石器の石質鑑定は、青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸氏によるものである。
- 7 本書に掲載した遺跡の位置図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図に基づき作成したものである。
- 8 遺構・遺物の文・図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。

(1)遺構番号は、一部を除いて発掘調査時のものを用いている。

(2)遺構内外の堆積土の注記は、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄 1987)を用いた。

(3)遺物の観察表・計測表中の出土地点の表記で、「A・」は平成4年度調査区域(A区)、「B・」は平成5年度調査区域(B区)を表す。

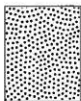
(4)石質の略称は以下とする。

珪	—珪質頁岩	閃緑	—閃緑岩	頁	—頁岩	黒	—黒曜石
玉髓	—玉髓	輝緑	—輝緑岩	砂	—砂岩		
玉珪	—玉髓質珪質頁岩	凝	—凝灰岩	安	—安山岩		
緑細	—緑色細粒凝灰岩	輝凝	—輝緑凝灰岩	流	—流紋岩		

(5)図中で使用したスクリーン・トーンの表示は次のとおりである。



スリ・焼土



敷打痕・門(くぼみ)

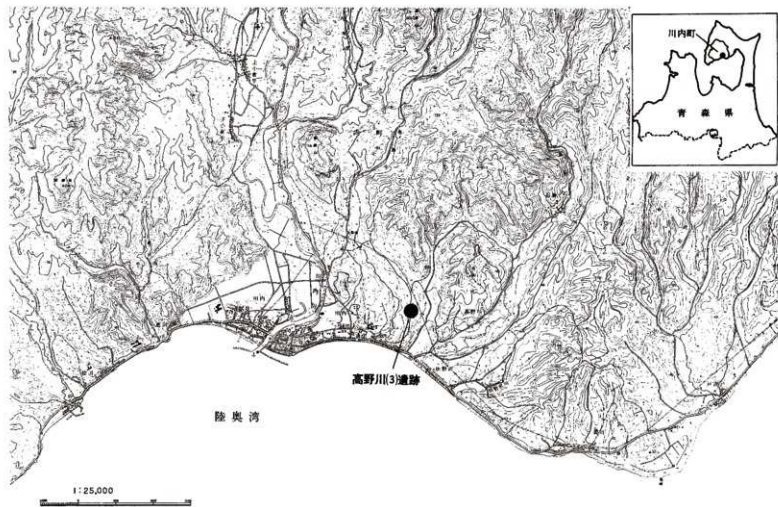
- 9 出土遺物、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の諸氏から御教示・御指導をいただいた。

(順不同、敬称略)

高橋 潤、寺田 徳穂、檜山 泰貴、半沢 紀、菊池 充三、鈴木 徹

目 次

序・例言・目次	
第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	
第1節 平成4年度調査方法	3
第2節 平成4年度調査の経過	3
第3節 平成5年度調査方法	4
第4節 平成5年度調査の経過	5
第Ⅲ章 遺跡の環境	
第1節 遺跡周辺の地形について	7
第2節 遺跡周辺の地質について	10
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	18
(1) 住居跡	18
(2) 土坑	22
(3) 土器埋設遺構	29
(4) 屋外炉	30
(5) 石組炉	30
(6) 焼土遺構	30
(7) 溝跡	32
第2節 遺構外の出土遺物	37
(1) 土器	37
(2) 石器	60
(3) 土製品・石製品	72
(4) 陶磁器・その他の遺物	72
第Ⅴ章 まとめ	76
◇写真図版	
◇報告書抄録	



第1図 遺跡の位置

第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

第1節 調査に至る経過

県農林部では、平成2年度から下北郡川内町を中心とする地域で、農林漁業用揮発油税財源替農道整備事業として県営農免農道整備事業（高野川地区）を計画してきた。

平成2年10月、県教育庁文化課では農免農道の計画路線内に川内町熊ヶ平遺跡が所在することを確認し、平成3年度にその発掘調査が実施されることになった。

平成3年7月1日から川内町熊ヶ平遺跡の発掘調査が開始され、7月下旬になって、県教育庁文化課が中心となって路線内の現地踏査が行われ、新たに遺跡とみられるところが何箇所か発見された。

新規の遺跡は、平成3年10月中に発掘調査がなされ、翌年度に報告書が刊行された川内町高野川(2)遺跡（県埋文報第153集：1993）、川内町板子塚遺跡、および川内町高野川(3)遺跡である。関係機関で協議したところ、平成4年度に、高野川(3)遺跡と熊ヶ平遺跡および板子塚遺跡の発掘調査を並行して実施することになった。そして、平成4年度の調査結果に基づいて、平成5年度にも第二次の高野川(3)遺跡の発掘調査が計画されたのである。

第2節 調査要項

- | | |
|------------|--|
| 1 調査目的 | 県営農免農道整備事業（高野川地区）の実施に先立ち、当該地区に所在する高野川(3)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用にあ資する。 |
| 2 調査期間 | 平成4年6月1日から同年11月20日まで
（当初予定 平成4年6月1日から同年10月8日まで）
平成5年8月18日から同年11月18日まで |
| 3 遺跡名及び所在地 | 高野川(3)遺跡（県遺跡番号 51029）
下北郡川内町大字川内字高野川71、91、108-19、外 |
| 4 調査面積 | 平成4年度 3,400平方メートル
平成5年度 2,500平方メートル |
| 5 調査委託者 | 青森県農林部農地建設課 |
| 6 調査受託者 | 青森県教育委員会 |
| 7 調査担当機関 | 青森県埋蔵文化財調査センター |

8 調査協力機関 川内町役場、川内町教育委員会、下北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教授	(考古学)
調査協力員	三浦 悦之助	川内町教育委員会教育長	
調査員	高島 成侑	八戸工業大学教授	(平成4年度、建築史)
	市川 金丸	青森県立郷土館学芸課課長補佐	(考古学)
	葛西 励	青森山田高等学校主事教諭	(考古学)
	遠藤 正夫	青森市教育委員会社会教育課課長補佐	(考古学)
	山口 義伸	青森県立板柳高等学校教諭	(地質学)

10 調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

[平成4年度]

調査第一課 総括主幹

課長	北林 八洲晴
主事	新岡 巖
主事	下山 信昭
主事	木村 高
調査補助員	斎藤 正宏、成田 和男
	斎藤 呂、今 正子

[平成5年度]

調査第三課 課長	鈴木 克彦
総括主査	木村 鉄次郎
主事	相澤 治
調査補助員	斎藤 正宏、村越 英二郎
	斎藤 美穂、工藤 一夫

(北林 八洲晴)

第Ⅱ章 調査方法と調査の経過

第1節 平成4年度調査方法

調査区域設定にあたり、道路建設用中心杭No.69を基準点(D-50)とし、No.69とNo.75を結ぶ東西方向の基準線をDライン、中心杭No.69でこれに直行する南北方向の基準線をNo.50ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.69(D-50)を起点として、東へ51, 52, 53, ……、西へ49, 48, 47, ……の順に算用数字を付し、また、北へC, B, 南へE, Fの順にアルファベット文字を付して、アルファベットと算用数字との組合わせで示した。具体的にはそのグリッドの北西隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドの東西方向の基準線は、 $N-52^{\circ}-W$ である。

測量原点(B.M)は、林道熊野川線工事用原点(17.139m)から移動し、調査区域内の任意の場所に必要に応じて5ヶ所設定した。

調査にあたっては、東西4m間隔でトレンチを設定し、分層発掘に努め、遺構・遺物を確認した際には適宜拡張する試掘先行の方法で実施した。

遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層の観察をしながら精査を進めた。しかし、遺構は1つも検出されなかった。

遺物の取り上げについては、遺構内出土の遺物がなかったため、遺構外遺物としてグリッド毎、層毎、種類別に分けて行った。なお、平成5年度の発掘において本遺跡の調査区域から出土した遺物との混同を避けるため、平成4年度の調査区域にA区という名称を与えた。

土層の名称は、基本層序については表土から下方にローマ数字を付した。

写真撮影は必要に応じて適宜行うこととし、カラーリバーサル及びモノクロームの2種類を使用した。

第2節 平成4年度調査の経過

平成4年5月18日午前、板子塚・熊ヶ平・高野川(3)三遺跡合同の発掘作業員の雇用説明会を実施し、同日午後からは発掘調査打合せ合同会議を川内町中央公民館において開催した。会議では本事業の概要及び発掘調査要項の説明と調査方法等について協議し、共通理解を図った。会議終了後、調査現場を踏査した。

6月1日、仮設建物を板子塚遺跡、熊ヶ平遺跡にそれぞれ設置し、発掘器材を搬入し、両遺跡の発掘調査を開始した。

高野川(3)遺跡の発掘調査は、仮設建物を移設して7月7日から開始した。その日から調査区域内の伐採された杉の枝葉の除去などの環境整備とグリッド設定を開始し、同月8日からはそれらと並行して測量原点（B、M）の移動を行った。10日からは試掘先行の粗掘り作業を開始した。

粗掘り作業は、4m×4mのグリッド毎に進め、遺物や遺構が出土・検出する土層まで掘り下げることとした。粗掘り作業が進むとともに第Ⅱ層より遺物がばらばらと出土した。先行するトレンチでは遺物を取り上げながら地山まで掘り下げ、遺物の包蔵状態と遺構の有無を確認した。8月下旬までに50ラインの東側を地山まで掘り下げた。しかし、遺構は検出されず、遺物は、縄文時代後期の土器を中心として石器、古銭等あわせて段ボール箱で2箱出土したのみであった。

9月からは50ラインの西を掘り下げたが、近代の陶磁器や縄文土器等がまばらに出土したのみで、これまた遺構は全く検出されなかった。そのため、9月下旬から撤収準備を開始し、10月8日をもって調査を無事終了し、翌日より熊ヶ平・板子塚遺跡の発掘調査に合流した。

出土遺物は、縄文時代後期の土器・石器、蛇紋岩質の翡翠の小玉、陶磁器、古銭等が、段ボール箱で3箱分であった。

(新聞 巖)

第3節 平成5年度調査方法

調査区域設定にあたって、道路建設用中心杭No.63を基準点（D-4）とし、No.63とNo.51を結ぶ東西方向の基準線をDライン、中心杭No.63に直行する南北方向の基準線を4ラインとして4m四方のグリッドを設定した。各グリッド杭の呼称は、中心杭No.63（D-4）を起点として、東へ3、2、1、西へ5、6、7、・・・の順に算用数字を付し、また、北へC、B、A、南へE、Fの順にアルファベット文字を付して、アルファベットと算用数字との組み合わせで示した。具体的にはそのグリッドの北東隅の基準杭の表示によるものとした。なお、グリッドの東西方向の基準線は、N-57°-Wである。測量原点（B、M）は、林道熊野川線工事用原点から移動し、調査区域内に数箇所設置した

調査にあたっては、グリッド法を用いた分層発掘とし、必要に応じて土層観察用のメインセクションベルトを残した。

遺構の調査は、原則として二分法・四分法で行い、土層を観察しながら精査を進めた。遺構実測図の縮尺は、原則として20分の1とし、必要に応じて10分の1を使用した。

遺物については、遺構外の場合はグリッド一括として、層位ごとに取り上げた。遺構内出土

遺物については、原則として平面図を作成し、標高、種類等を記録しながら取り上げた。なお遺物に関しては、平成4年度の発掘において調査区域から出土した遺物との混同を避けるため平成5年度の調査区域にB区という名称を与えた。

土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を、遺構内堆積土については上位から下位に算用数字を各々付すことにした。土層観察にあたっては「標準土色帖」を用い注記した。

写真撮影は、カラーリバーサル及びモノクロームの2種類を使用した。

第4節 平成5年度調査の経過

平成5年8月18日、調査開始。当初、木村チームが調査に入る予定だったが、畑内遺跡の調査が8月27日まで延長になったため、チーム到着までの間、鈴木課長が本遺跡を担当することになった。前年度の調査終了時に残された物置小屋を修理、仮設建物と合わせて発掘器材を撤入した。調査区域内の杉の枝葉の除去、路線巾杭・センター杭の位置の確認をし、発掘調査の環境を整えた。翌日から掘削開始。調査区東側・中央付近と西側斜面等にトレンチを開け、出土遺物・土層の確認をする。まだグリッド設定がなされていないため、前年度の発掘区域の境界線から20mごとに赤杭を打ち、仮に1区から7区までを設定して遺物の取り上げを進めていった。主に縄文時代後期（十腰内I式）の土器片が取り上げられる。

8月30日、木村チーム到着。早速、工事用センター杭No.63とNo.51を結ぶラインを基軸として杭打ちを開始し、グリッド設定に取りかかる。そうして設定されたグリッドを拡張していく形で掘削を進める。土器片、石器を中心とした遺物の出土はあるが、遺構の検出はない。

9月13日午後、高野川(3)遺跡発掘調査打合せ会議を川内町中央公民館において開催。会議では、本事業の概要及び発掘調査要項の説明と調査方法等について協議し、共通理解を図った。会議終了後、調査現場において調査状況の説明を行った。

10月中旬以降、高野川(3)遺跡で第1号住居跡を始めとする遺構の検出が相次ぐ。遺構は、5ラインから12ラインまでの間と、23ラインから28ラインまでの間に集中する傾向にあるが、地山と覆土の土色の差が微妙な遺構がほとんどで、プランの確認にはかなりの困難を伴った。

11月18日、遺構の精査、遺物の取り上げ完了。調査器材と遺物を撤収して調査を無事終了した。

なお、9月下旬、熊野川を挟んで高野川(3)遺跡の西端と隣り合う、熊ヶ平遺跡寄りの農道建設予定地部分にも遺物の散布が認められるため、その措置について文化課及び青森県農林部農地建設課と協議に入った。その結果、高野川(3)遺跡発掘調査の人員及び予算の中で対応し、その期間内で並行して熊ヶ平遺跡部分の発掘調査を実施することになった。その調査結果につい

ては、平成7年度以降に刊行する報告書に掲載する予定である。

(相澤 治)

第三章 遺跡の環境

青森県立板柳高等学校教諭 山口 義伸

第1節 遺跡周辺の地形について

斧の形状をなす下北半島は四周を海に囲まれている。北は津軽海峡、東は太平洋、南は陸奥湾、そして西は平館海峡に各々臨んでいる。平館海峡の西方には津軽半島が対峙している。

斧の刃部にあたる半島西部には、大作山(776.3m)・崑倉山(686.3m)・袴腰山(621.7m)・縫道石山(626m)・アンド山(645.7m)・八郎岳(598m)等の山稜が点在していて西部山地を形成している。この西部山地は陸奥湾を挟んでいるが、奥羽脊梁山脈の北の延長部にあたる。なお、西部山地の東縁部には第4紀火山としての恐山火山及び燧岳火山が存在する。最近の研究によると、那須火山帯に所属する両火山のうち、恐山火山は火山フロントを形成する青森-恐山火山列、燧岳火山は脊梁火山列の岩石区に細分されている(生出・中川・蟹沢, 1989)。

一方、東方の太平洋側では桑畑山及び片崎山の丘陵地があって、浸食平坦面を成しドリーネなど石灰岩地帯特有の地形が観察される。また、海岸段丘の発達も顕著であって、大矢・市瀬(1957)によると、高位段丘(海拔300~240m)から低位の第5段丘(20~10m)までおよそ6段が階段状に発達しているのが認められる。

半島中央部には田名部低地帯があって、田名部川が低地帯を蛇行しながら陸奥湾に向かって流れ河口には三角州が認められる。(奈良, 1989)。他に、下北半島の主要河川としては川内川及び大畑川があげられる。大畑川は恐山火山と燧岳火山の境界部をほぼ東流して津軽海峡に注ぎ、川内川はほぼ西部山地と恐山火山の山麓部との境界部を南流して陸奥湾に注いでいる。

恐山火山は、ほぼ中央部に直径5kmのカルデラがあって、宇曾利山湖となっている。カルデラ内には後カルデラ丘としての鶏頭山(321m)及び剣山(395m)の熔岩ドームが存在する。カルデラの周囲には、屏風山(628m)・小盡山(513m)・大盡山(827.7m)・円山(806.7m)などの諸峰を連ねた外輪山が認められ、さらに外輪山南麓には釜臥山(878.6m)・毛無山(780m)・障子山(863m)・北国山(840m)・荒川岳(740m)などの諸峰が存在する。

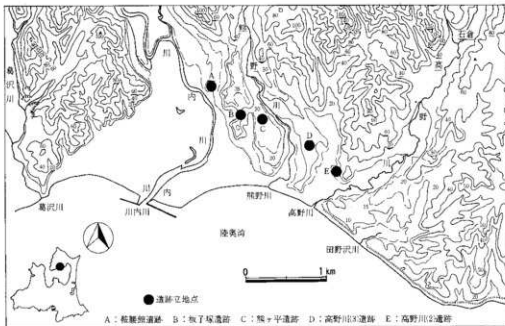
ところで、高野川(3)遺跡の所在する下北郡川内町は陸奥湾北岸のほぼ中央部に位置する。西方から宿野部川・松川・川内川・熊野川・高野川・戸沢川などの諸河川があって、川内川以外はいずれも河口からの距離が短く河床勾配が急である。このうち、熊野川及び高野川は恐山火山体の外輪山を源とする放射谷である。川内川は、和白沢・阿部城沢・八木沢などの恐山火山体を浸食する放射谷を支流にもち、陸奥湾に向かって南流している。河口付近には沖積平野が

やや広く発達している。なお、各河川の河口付近には集落が点在している。

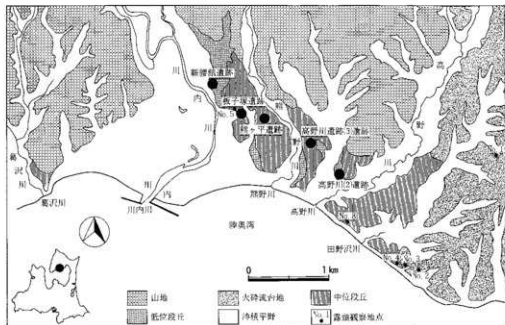
また、陸奥湾北岸の大湊から臨野沢にかけて発達する段丘は、高い順に、宿野部段丘・川内段丘・永下段丘の3段に大別できる(中川, 1972)。中川(1972)によると、高位段丘の宿野部段丘は標高約40mで、山地及び丘陵地縁辺部に断片的に分布する。特に宿野部川及び川内川沿いに小規模に発達し、段丘面はかなり開析されている。中段段丘の川内段丘は標高15~20mで海岸及び河川沿いに帯状に発達し、段丘面はかなり平坦である。低位段丘の永下段丘は標高4~10mで、主に河岸沿いに幅広く発達して河川に向かって緩やかに傾斜している。

図2は遺跡周辺の等高線図を示したものである。川内川以西では等高線の間隔が密であり、開析により入り組んだ状態を示していて急峻な地形となっている。同様な傾向が川内川-高野川間の標高40m以上の等高線においても認められる。ただ、高野川以東の、戸沢川とに挟まれた丘陵地(図の右端にあたり田野沢峠と呼ぶ)では少なくとも100m以下の等高線の間隔が粗く、また等高線の入り組みもゆるく緩慢に起伏する地形となっている。

図3には遺跡周辺の地形区分を示した。川内川以西及び川内川-高野川間の等高線の間隔が密な標高およそ40m以上の部分はこの地域における基盤岩の浸食によるものと考えられ、田野沢峠を含めた高野川以東の緩慢に起伏する部分は恐山火山に起因する火砕流台地の浸食面と判断し地質調査において確認している。段丘の発達をみると、葛沢川河口付近に小規模にみられる以外は川内川以東に広く発達している。中川(1972)のいう段丘群のうち、中段段丘に相当する川内段丘が陸奥湾岸に沿って幅2km未満で発達し、熊野川及び高野川などによって大きく開析されている。本段丘は標高10~40mであって、浸食谷による開析が進んでいるが全体としてはきわめて平坦で陸奥湾に向かって緩傾斜している。ただ、標高20~25mを境として2段に区分できるものと思われる。川内段丘下位面は標高10~20mであって、陸奥湾に向かってきわめて緩く傾斜し開析度及び起伏度が小さい。これに対して、本段丘上位面は標高30~40mであって山地及び丘陵地の縁辺部に小規模に発達し陸奥湾への傾斜がやや大きく起伏度も大きい。おそらく、本段丘上位面は中川(1972)のいう宿野部段丘に相当するものと思われるが、詳細な地質調査が必要である。なお、川内段丘は田野沢の海岸付近で比高10mの、川内川左岸で約20mの急峻な段丘崖でもって沖積平野に臨んでいる。低位段丘に相当する永下段丘は川内川・熊野川・高野川などの河口付近にあって、上位の川内段丘の縁辺部に小規模に発達しているのが確認できる。標高5~12mであり、河川への傾斜面となっている。川内段丘とは5~10mの段丘崖で接するが、沖積平野へは埋没しているものと思われ一般的には段丘崖が認められない。永下段丘に立地する鞍腰館遺跡付近では川内川がS字状にカーブして比高5m以下の段丘崖が認められたが、他は高野川(2)遺跡付近で確認したように沖積平野下に埋没しているものと思われ、その境界部は構成する堆積物で地形区分される。



第2図 遺跡周辺の等高線図



第3図 遺跡周辺の地形分類図

高野川(3)遺跡は熊野川と東方の高野川支流との間に舌状に発達する川内段丘上に立地している。高野川(3)遺跡の西方には熊ヶ平遺跡が位置し同じ川内段丘上に立地している。また、東方の高野川とその支流との合流地点には高野川(2)遺跡が立地している。高野川(3)遺跡の調査区域は熊野川河口から約700m上流にあって、図4 a・bに示したように蛇行する熊野川に臨む川内段丘の西端部(標高17~20m)及び流域に小規模に発達する永下段丘(12~14m)上に位置している。

第2節 遺跡周辺の地質について

次に、地質の概要を述べたい。斧の刃部にあたる西部山地はいわゆるグリーンタフ地帯であって、新第三紀中新統の緑色凝灰岩を主とした堆積物からなり、この地域の基盤岩をなしている。また、東方の丘陵地帯では中生代の粘板岩・チャートからなっている。川内川以東に位置する恐山火山体においてはその火山噴出物が基盤岩を不整合に覆っている。田名部低地帯では恐山火山噴出物及び砂や泥などからなる田名部層が堆積している。

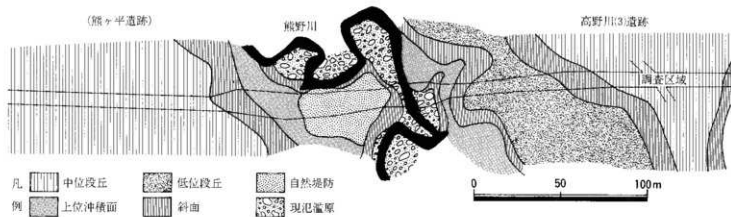
恐山火山の噴出物は主に溶結凝灰岩・角礫凝灰岩・浮石流凝灰岩・粘土質降下火山灰などからなり、分布範囲はNE-SW方向を長軸とする楕円状(長軸27km、短軸14km)を呈し、宇曾利山湖を中心とした火山体の東方に偏っている(奈良, 1989)。この恐山火山体は標高約200mまでは急峻な火山体をなし、主に安山岩溶岩からなっている。また、標高約80mまでは山麓地形をなし、主に角礫凝灰岩や浮石流凝灰岩などからなっている。特に、田野沢付近では浮石流凝灰岩からなる火砕流台地となっている。

ところで、生田・中川・蟹沢(1989)によると、次のような恐山火山の形成史を想定している。この火山は数十万~十萬年前に形成されたと推定され、その活動は釜臥山活動期・主活動期・カルデラ形成期・後カルデラ形成期の4期に区分される(図5)。

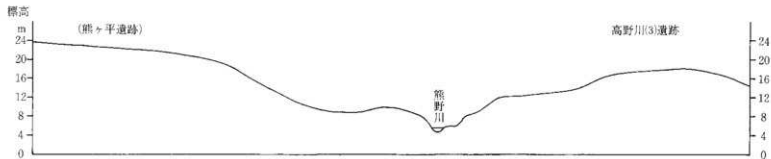
初期の釜臥山活動期では、恐山火山体の南麓において安山岩溶岩・火砕流堆積物からなる釜臥山成層火山体が形成される。釜臥山の形成後に障子山の熔岩円頂丘が形成される。

主活動期では、屏風山から大霊山を経て円山・朝比奈岳に至る火口群から大量の軽石流・火砕流堆積物及び少量の熔岩が噴出する。このため大部分の釜臥山活動期の噴出物が覆われてしまう。この火砕流の噴出に関連して、カルデラ形成期としての宇曾利カルデラが形成される。そして、後カルデラ形成期では火山体東部へ軽石流堆積物が流下した後に、カルデラ内において剣山及び鶏頭山の熔岩円頂丘が形成される。

なお、大畑川を挟んで恐山火山体の北側に位置する燧岳火山は標高約300mまでは安山岩溶岩からなる台地状の地形をなし、佐藤ヶ平と呼ばれている。



第4図a 調査区域の地形区分図



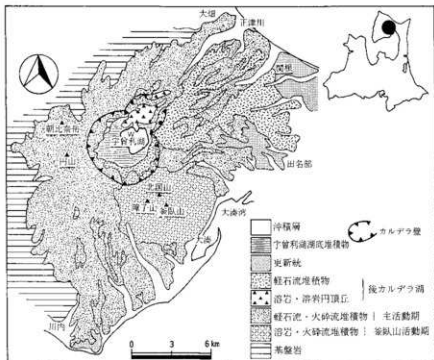
第4図b 調査区域の地形断面図

遺跡周辺における地層の分布は南流する川内川をほぼ境に東西で大きく異なる。西方では新第三紀中新統の基盤岩である緑色凝灰岩が主体であって急峻な山地をなしている。一方、東方では恐山火山の噴出物が基盤岩に不整合にのっていて比較的緩やかな丘陵地をなしている。特に、高野川以東の田野沢峠付近ではいわゆる火砕流台地を形成し、この火砕流は生田・中川・蟹沢(1989)による恐山火山の主活動期にあたる火砕流堆積物に相当するものと考えられる。

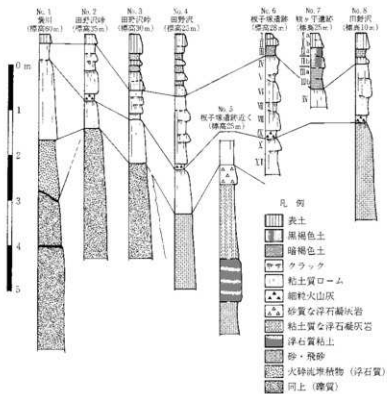
なお、遺跡周辺における地形、特に段丘の発達と恐山火山噴出物との関係を図6に示した。高野川(3)遺跡が立地する川内段丘は露頭観察地点である田野沢海岸と川内川流域とではその段丘構成層の層相に変化が認められる。田野沢海岸付近での段丘面は標高10~20mときわめて平坦であって、円礫層及び砂鉄層がレンズ状に挟む成層した中~粗粒砂が主体をなしている。これに対して、川内川流域での段丘面は標高20~40mと標高が高く起伏にやや富んでいる。その構成層は塊状の浮石質粘上、砂質浮石、浮石質砂など火山性起源の二次的堆積物であって、層厚0.5~3m単位で成層し堆積している。また、これらの水成堆積物を覆う降下火山灰(粘土質ローム)として上位に堆積する黄褐色ソフトロームと下位の赤褐色ハードロームとに識別できる。ソフトロームは田野沢海岸付近に発達する川内段丘の構成層である砂鉄質の成層砂を覆っている。ハードロームは田野沢峠付近に発達する火砕流台地においてその火砕物を覆い、またハードローム層上部が川内段丘上位面を覆っている。高野川(3)遺跡では黒色上直下のソフトロームまでの堆積しか確認できなかったが、おそらくローム層下には板子塚遺跡同様に川内川流域に発達する段丘構成層と同じ堆積物が存在するものと思われる。

次に、高野川(3)遺跡の調査区域内における基本層序についてその概要を述べたい。ただ、川内段丘と永下段丘とではその構成層に相違が認められるので、主として23ラインで確認した永下段丘の基本層序に基づいて記述する。(第7図)

- I 層 黒褐色土(10YR 3/1)…厚さ30~50cm。耕作土であって、下位層とはシャープな面で接することが多い。全体的に耕作による攪乱が認められ、粘性・湿性が多少あるが締まりに欠けソフトな感じを受ける。炭化粒、ローム粒などの混入が目立つ。層相変化から、I a層及びI b層に区分される。I a層は現耕作土であって、約10cmと平均的な厚さをもち、やや堅さがみられる。cutting面に苔の発生が認められる。I b層は厚さが20~30cmであって、攪乱により締まりがなく脆い。
- 間層 黒褐色土(10YR 2/3)…局部的にレンズ状の堆積を示し、10~30cmの厚さをもつ。径10cm大の粘土ブロックが多量に混入する黒褐色土で、締まりに欠け脆い。
- II 層 黒褐色土(10YR 2/2)…厚さ約20cm。I層よりは色調が暗く全体的に腐植質であり、炭化粒・焼土粒及び粘土粒の混入が認められる。粘性・湿性があり、堅さ及び締まりも認められる。



第5図 恐山火山の地質図 (生田・中川・蟹沢 1989による)

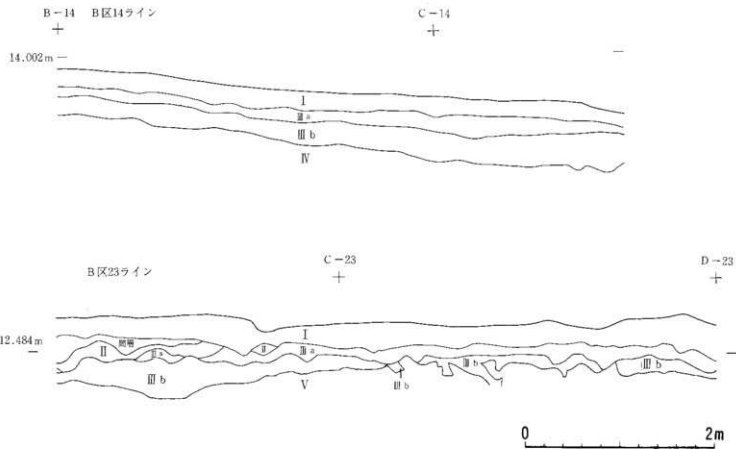


第6図 遺跡周辺の路頭における模式柱状図

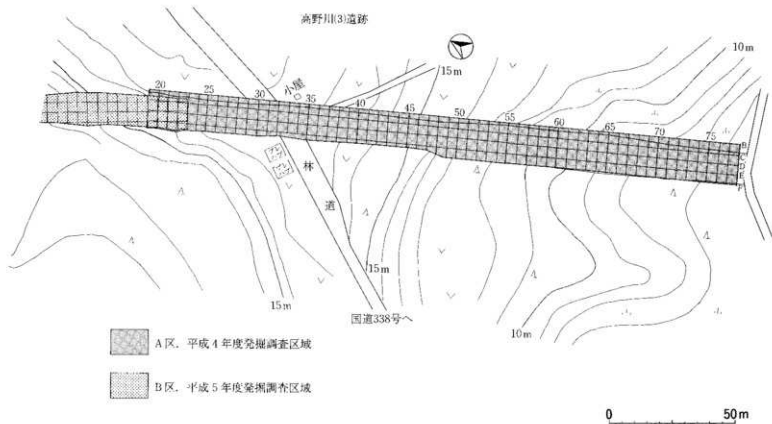
- Ⅲ 層 暗褐色土(10YR3/3~3/4)…厚さ30~50cm。川内段丘面ではローム層への漸移層であって、ローム粒及びロームブロックの混入が目立ち全体的にローム質となっている。粘性・湿性があり、また堅さ及び締まりが認められる。炭化粒及び焼土粒などの混入物はほとんどない。水下段丘面では、23ラインで確認したところ浸食によりローム層の堆積はなく、粘土粒及びロームブロックの混入が多く粘土質となっている。2層に分層され、上位のⅢ a層は色調が暗く(10YR 3/3)、多量の粘土粒のほか焼土粒、炭化粒の混入が少量認められる。
- Ⅳ 層 黄褐色ローム(10YR 5/6)…厚さ20cm以上。粘土質で堅さ及び締まりが認められる。上位の降下火山灰(ソフトローム)に相当する。なお、川内段丘面では本層下位には黄褐色ローム(10YR 5/8)が約1m堆積している。ただ、23ラインでは本層が欠如していて下位の粘土層が堆積している。
- Ⅴ 層 粘土層(10YR 4/4)…厚さ30cm以上。水下段丘の構成層を成す。所々酸化の染みが認められ赤褐色を呈している。明緑灰色(10GY 7/1)を呈する径5~10cm大の粘土ブロックの混入が認められる。

(引用・参考文献)

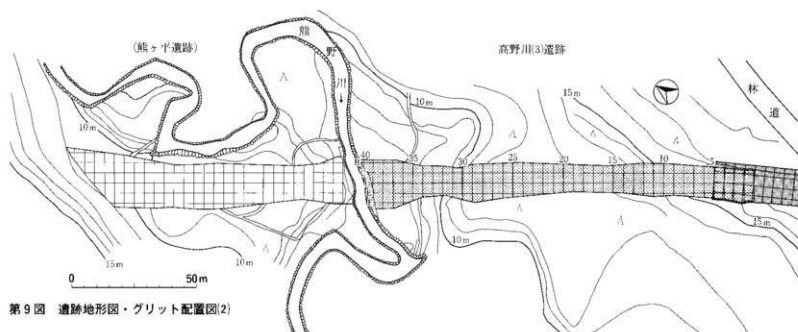
- 桑野幸夫 1956 田名部周辺の第四系 下北半島北部の第四系 第一報 資源科学研究所彙報 No.40
- 郷原保真・桑野幸夫・出生慶司 1957 恐山火山の地質(予報) 下北半島北部の第四系 第二報 資源科学研究所彙報 Nos.43-44
- 桑野幸夫 1957 田名部低地帯北部の第四系 資源科学研究所彙報 Nos.43-44
- 大矢雅彦・市瀬由自 1957 下北半島の海岸地形 第二報 資源科学研究所彙報 Nos.43-44
- 中川久夫 1972 青森県の第四系 青森県の地質 第二部 青森県
- 青森県地学教育研究会 1975 日曜の地学 青森・太平洋側をめぐる 築地書館
- 青森県教育委員会 1976 水木沢遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 橘 善光・奈良正義 1985 梨の木平遺跡発掘調査報告 むつ市文化財調査報告書第12集
- 青森県教育委員会 1986 大湊近川遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 出生慶司・中川久夫・蟹沢聰史 1989 日本の地質2 東北地方 共立出版株式会社
- 奈良正義 1989 むつ市史 自然編 むつ市
- 青森県教育委員会 1993 高野川(2)遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第153集
- 青森県教育委員会 1995(予定)熊ヶ平遺跡・板子塚遺跡 青森県埋蔵文化財調査報告書第180集



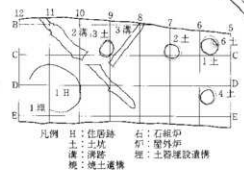
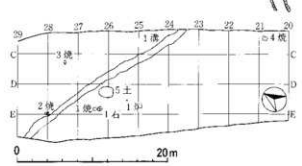
第7図 遺跡内基本層序



第8図 遺跡地形図・グリッド配置図(1)



第9図 遺跡地形図・グリッド配置図(2)



凡例 H: 住居跡 右: 石組印
 土: 土坑 印: 壁外炉
 溝: 溝跡 埋: 土器埋設遺構
 礎: 礎土遺構

 A区、平成4年度発掘調査区域
 B区、平成5年度発掘調査区域

第10図 B区遺構配置図

第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

平成4年度の調査では、調査区域（A区）からの遺構の検出はなかった。

平成5年度、調査区域（B区）において検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑6基、土器埋設遺構1基、屋外炉1基、石組炉1基、焼土遺構4基、溝跡3条である。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第11図・第12図）

＜位置＞ B区C・D-10・11グリッドに位置する。

＜確認＞ 暗褐色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。

＜重複＞ 本遺構第4層を掘り込んで、第1号土器埋設遺構を構築した可能性がある。この場合、本遺構の方が古い。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形で、その径は18m×14mをはかる。長軸方向は、ほぼ真北を向く。

＜壁＞ 地形が西側に傾斜しているため、全体的に東側が高く西側は低い。西壁以外の壁が残っており、その壁高は、東壁 90～120cm、北壁40～90cm、南壁 30～100cmである。

＜床面＞ ほぼ平坦である。全体的に、やや西側に傾斜している。

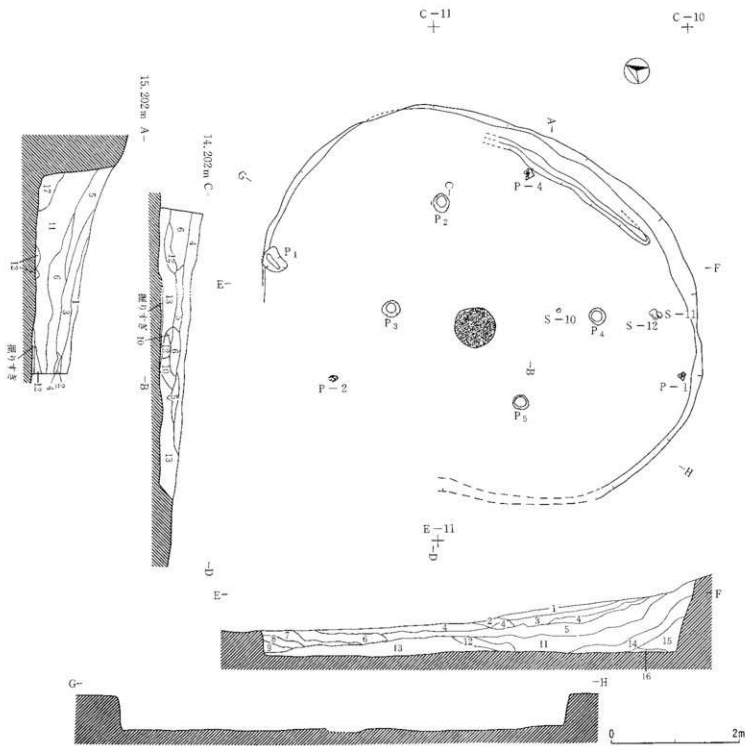
＜壁溝＞ 東壁寄り内側に、幅15～25cm、長さ 2.9mほどの壁溝と思われる施設を検出したが明瞭なものではなかった。

＜柱穴・ピット＞ 壁中に1個、住居跡内部に4個、計5個のピットを検出した。ピットの深さはP₁-21cm、P₂-27cm、P₃-29cm、P₄-40cm、P₅-24cmである。

＜炉＞ 直径65cmほどの、円形の地床炉である。5cmほどの深さで、平坦にくぼんでいる。

＜堆積土＞ 全体的に、ローム粒やロームブロックを含む黒褐色土と暗褐色土が主体である。

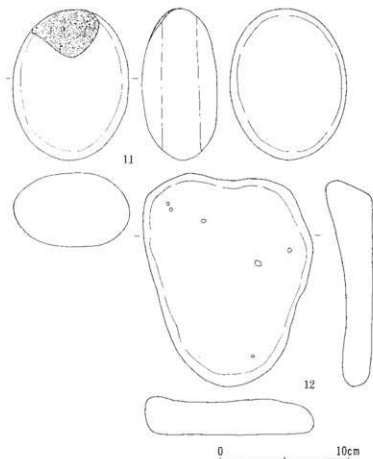
＜出土遺物＞ 確認面から床面ににかけて、多くの遺物が出土した。土器は、床面から2点、覆土から2点出土しており、縄文時代後期十層内Ⅲ式のものと思われる。1は、ほぼ完形品の小型深鉢形土器で、覆土内より横転した状態で出土している。2は、壺形土器の口頸部で羽状縄文が縦方向に施文されており、床面に直立した状態で出土したが、胴部は出土しなかった。石器は、床面から不定形石器（スクレイパー）1点、磨石2点、石皿1点、石核1点、覆土から石匙1点と不定形石器（スクレイパー）2点の計8点が出土した。石質は、10が緑色細粒凝灰岩、

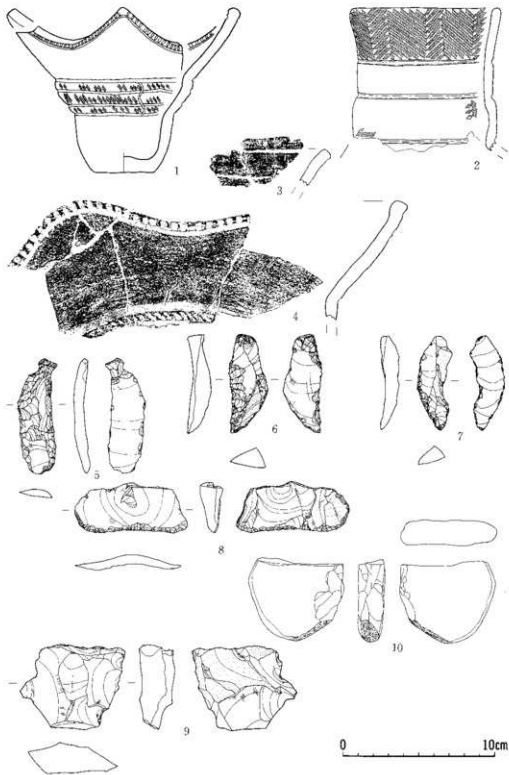


第11図 第1号住居跡(1)

第1号住居跡

- | | | | |
|------|------|----------|---------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ロームブロックや多く含む |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒少し含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | 7.5YR4/3 | ロームブロックやかなり多く含む |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | ロームブロックや多く、炭化粒微量含む |
| 第5層 | 暗褐色土 | 10YR3/2 | ローム粒少し、焼土粒、炭化粒微量含む |
| 第6層 | 暗褐色土 | 10YR2/2 | ロームブロック少し、炭化粒少量含む |
| 第7層 | 暗褐色土 | 10YR2/3 | ローム粒や多く含む |
| 第8層 | 暗褐色土 | 7.5YR3/2 | 炭化粒少し含む、7層に似る |
| 第9層 | 暗褐色土 | 10YR2/3 | ローム粒、炭化粒少し含む |
| 第10層 | 暗褐色土 | 7.5YR3/2 | 炭化粒のみ多く、焼土粒、ローム粒多く含む |
| 第11層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒、炭化粒、焼土粒少し含む |
| 第12層 | 暗褐色土 | 5YR3/4 | 焼土粒、ロームブロック極めて多く、炭化物少し含む |
| 第13層 | 暗褐色土 | 7.5YR3/3 | 女性にローム粒、焼土粒多く、炭化粒部分的に多く含む |
| 第14層 | 暗褐色土 | 7.5YR4/4 | ロームブロックや多く、炭化粒少し含む |
| 第15層 | 暗褐色土 | 7.5YR4/3 | ロームブロックや多く、炭化粒少し含む |
| 第16層 | 暗褐色土 | 7.5YR3/3 | ローム粒や多く、炭化粒少し含む |
| 第17層 | 暗褐色土 | 7.5YR3/2 | ローム粒、炭化粒少し含む |





第12图 第1号住居跡(2)

11が閃緑岩、12が頁岩、その他が珪質頁岩である。11の磨石と12の石皿は、使用時のセット関係を示すように、重なった状態で床面から出土している。

(2) 土坑

第1号土坑 (第13図)

<位置> B区B-5グリッドに位置する。

<確認> 黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> 第6号土坑と重複している。本土坑の構築によって、はじめてその底面に第6号土坑を構築することが可能となることから考えて、第6号土坑よりも古い。しかし、ほぼ同時期に機能していたものと思われる。

<平面形・規模> 平面形は、開口部及び底面ともに楕円形を呈する。規模は、開口部の径が2.2m×2.05m、底面の径が2.5m×2.3m、深さ1.6mである。

<壁> ほぼフラスコ状である。

<底面> 平坦である。東壁寄りに、第6号土坑が開口している。

<堆積土> 14層に分層された。全体的に、ローム粒やロームブロックを含んだ黒褐色土、暗褐色土、褐色土の堆積が見られた。上位の層は、炭化粒を少し含んでいる。

<出土遺物> なし。

第2号土坑 (第14図)

<位置> B区B-6・7グリッドに位置する。

<確認> 暗褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

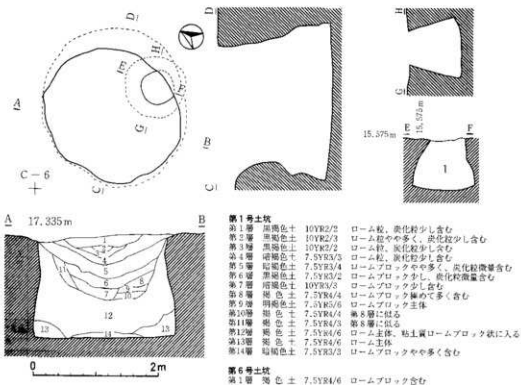
<平面形・規模> 平面形は、開口部及び底面ともにやや不整な円形である。規模は、開口部の径が1.95m×1.9m、底面の径が2.3m×2.1m、深さ1.8mである。

<壁> フラスコ状である。

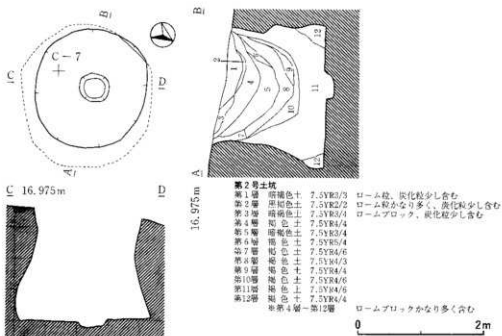
<底面> 平坦である。ほぼ中央に、直径50cm、深さ10cmほどの円形のピットを有する。

<堆積土> 12層に分層された。全体的に、ローム粒やロームブロックをかなり多く含んだ黒褐色土、暗褐色土、褐色土の堆積が見られた。上位の層は、炭化物を少し含んでいる。

<出土遺物> なし。



第13図 第1号土坑及び第6号土坑



第14図 第2号土坑

第3号土坑 (第15図)

<位置> B区B-8・9グリッドに位置する。

<確認> 暗褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

<平面形・規模> 平面形は、開口部が不整な楕円形、底面がほぼ円形である。規模は、開口部の径が2.2m×1.6m、底面の径が1.9mほど、深さ1.3mである。

<壁> 中位の部分がすぼまっており、フラスコ状である。

<底面> 平坦である。

<堆積土> 16層に分層された。全体的に、ローム粒やロームブロックをかなり多く含んだ暗褐色土、褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 覆上から、縄文時代後期のものと思われる土器片が2片出土した。1は無文、2は横に展開する羽状縄文が施文されている。

第4号土坑 (第16図)

<位置> B区D-5グリッドに位置する。

<確認> 暗褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

<平面形・規模> 平面形は、開口部が楕円形、底面がほぼ円形である。規模は、開口部の径が2.0m×1.8m、底面の径が2.3mほど、深さ1.1mほどである。

<壁> フラスコ状である。

<底面> ゆるやかな起伏があるが、ほぼ平坦である。

<堆積土> 15層に分層された。全体的に、ロームブロックを多く含むが、上位の層は炭化粒も含んでいる。

<出土遺物> なし。

第5号土坑 (第17図・第18図・第19図)

<位置> B区D-25・26グリッドに位置する。

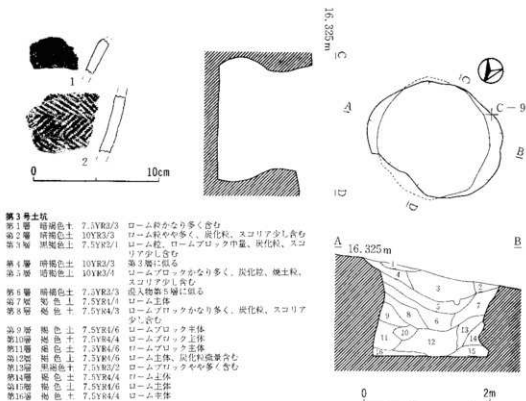
<確認> 黒色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

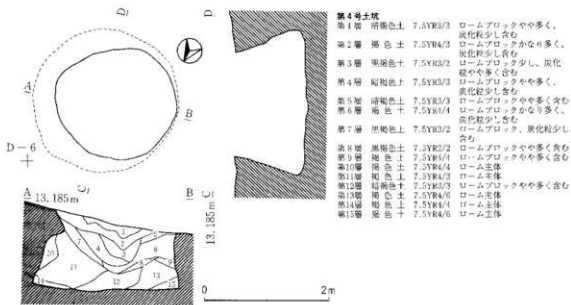
<平面形・規模> 平面形は不整な楕円形で、その径は1.9m×1.6m、深さ45cmである。

<壁> ゆるやかに立ち上がる。

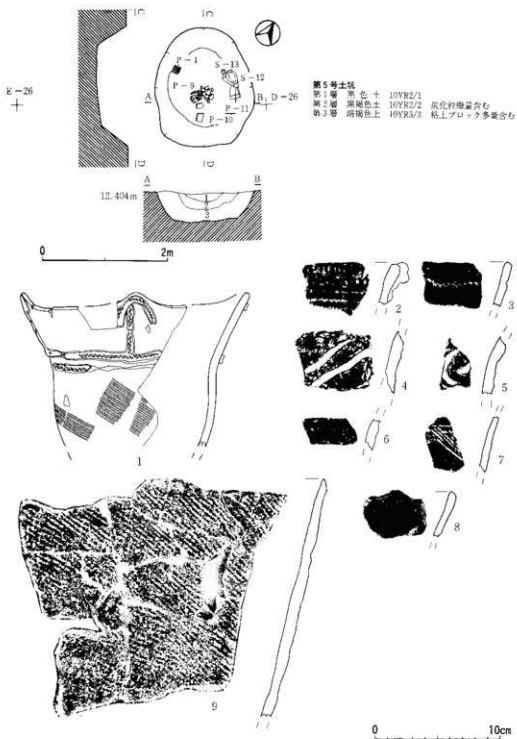
<底面> ほぼ平坦である。



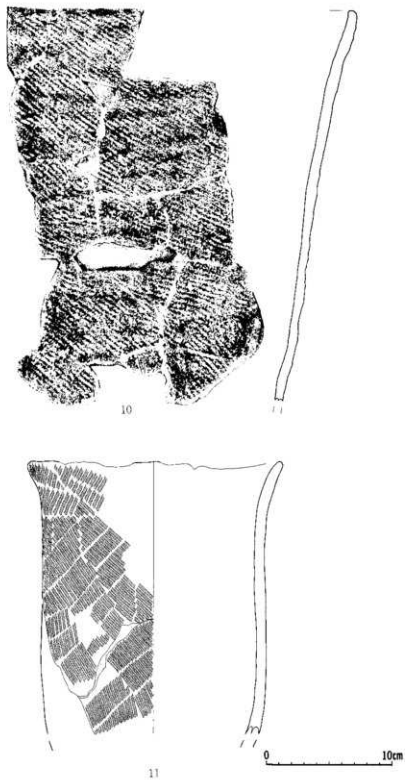
第15図 第3号土坑



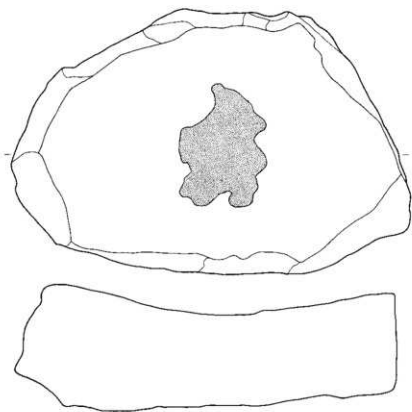
第16図 第4号土坑



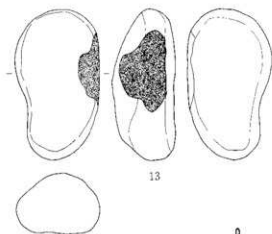
第17図 第5号土坑(1)



第18图 第5号土坑(2)



12



13

0 10cm

第19图 第5号土坑(3)

＜堆積土＞ 3層に分層された。

＜出土遺物＞ 覆土から多くの遺物が出土した。1は、4個の波状口縁を持つ深鉢形土器で、波状部から垂下する隆帯と連結する隆帯を、横に2本巡らし、その上面にLR縄文原体の側面圧痕を施している。3は深鉢形土器の口縁部で、無節Lを縦位に施文した上に、その原体の側面圧痕を口縁に平行に残す。1と3の両者とも、牛ヶ沢(3)遺跡第Ⅲ群土器に比定できる後期初頭の土器である。11は、口縁部付近に炭化物が著しく付着した深鉢形土器である。石器は、石皿、磨石各1点ずつである。石質は、12が安山岩、13が流紋岩である。

第6号土坑 (第13図)

＜位置＞ B区B-5グリッドに位置する。

＜確認＞ 第1号土坑の底面に、褐色土の落ち込みとして確認した。

＜重複＞ 第1号土坑よりも新しいが、ほぼ同時期に機能していたものと思われる。

＜平面形・規模＞ 平面形は、開口部及び底面ともに不整形である。規模は、開口部の径が55cmほどで、底面の径が1mほど、深さは第1号土坑の開口部から2.4m、底面からは80cmである。

＜壁＞ フラスコ状である。

＜底面＞ ほぼ平坦である。

＜堆積土＞ しまりのない褐色土1層のみである。

＜出土遺物＞ なし。

(3) 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構 (第20図)

＜位置＞ B区D-11グリッドに位置する。

＜確認＞ 基本土層Ⅲb層を掘り込んで埋めてある土器の口縁部の一部として確認したが、第1号住居跡の覆土第4層とⅢb層を誤認した可能性もある。

＜重複＞ 本遺構検出時には、第1号住居跡はまだ未検出であったが、その範囲内からの検出であるため、第1号住居跡覆土内からの遺物となる可能性もある。

＜検出状況＞ 土器の埋設方法は正立埋設で、若干南側に傾斜している。掘り方は、埋設した土器の規模・形態に合わせて掘り込まれており、その掘り込みの深さは8cmほどである。土器(第20図1)は、口縁部には縦に展開した羽状縄文が施され、胴部には沈線で区切られた単位で磨消がなされた縄文時代後期十腰内皿式のものである。胎土はかなり脆い。

(4) 屋外炉

第1号屋外炉 (第21図)

<位置> B区D-25グリッドに位置する。

<確認> 基本土層Ⅲb層を掘り込んで埋めてある土器の胴部の一部として確認した。

<重複> なし。

<検出状況> 土器の埋設方法は正立埋設で、若干東側に傾斜している。土器(第21図2)は深鉢形で、RL縄文を縦位に施文しており、上半部は全く欠損している。土器の北端に接する範囲に焼土が分布していることから、炉として使用する目的で土器を埋設し、実際に使用したものと考えられる。土器の東側に配置されている石も、炉の一部と思われる。

(5) 石組炉

第1号石組炉 (第22図)

<位置> B区D-26グリッドに位置する。

<確認> 焼土混じりの暗褐色土と、それを囲む配石として確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 70cm×60cmほどの規模で、ほぼ長方形に構築された石組炉である。10cmほど掘り込んで配石されている。

<堆積土> 2層に分層された。第1層には焼土が若干含まれているが、残り具合はあまりよくない。第2層は配石の際の掘り方である。

<出土遺物> なし。

(6) 焼土遺構

第1号焼土遺構 (第22図)

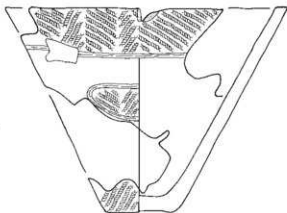
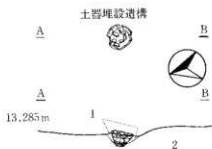
<位置> B区D-26グリッドに位置する。

<確認> 第1号石組炉の北西に隣接する、赤褐色土(焼土)の分布範囲として確認した。

<重複> なし。

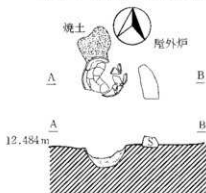
<規模・形状> 焼土範囲はほぼ楕円形を呈し、径は60cm×48cmである。

<出土遺物> なし。



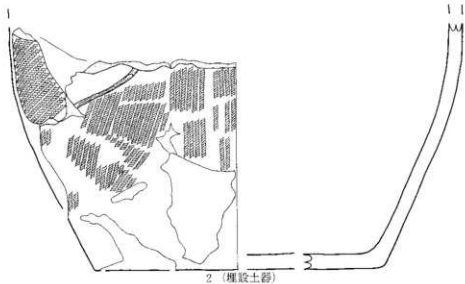
第20図 第1号土器埋設遺構

1 (埋設土器)



第1号土器埋設遺構

第1層 黒褐色土 10YR3/2 炭化粒痕微量含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ロームブロック含む、炭化粒痕微量含む



第21図 第1号屋外炉

第2号焼土遺構（第23図）

<位置> B区D-28グリッドに位置する。

<確認> 赤褐色土（焼土）の分布範囲として確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 全体的に見ると、焼土範囲は不整楕円形に近く、径は60cm×45cmである。

<出土遺物> なし。

第3号焼土遺構（第23図）

<位置> B区C-27グリッドに位置する。

<確認> 赤褐色土（焼土）の分布範囲として確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 全体的に見ると、焼土範囲は不整楕円形に近く、径は60cm×42cmである。

<出土遺物> なし。

第4号焼土遺構（第23図）

<位置> B区B-20グリッドに位置する。

<確認> 赤褐色土（焼土）の分布範囲として確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 全体的に見ると、焼土範囲は不整な方形に近く、その規模は80cm×70cmほどで、厚さが12cmほどである。

<堆積土> 3層に分層された。

<出土遺物> なし。

(7) 溝跡

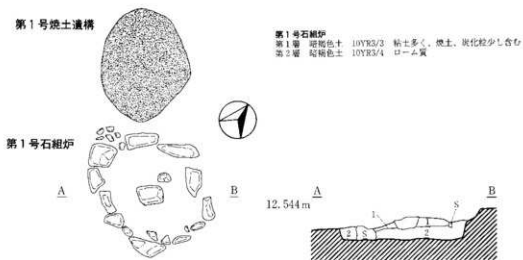
第1号溝跡（第24図・第25図）

<位置> B区B-23-E-28グリッドにかけて位置している。

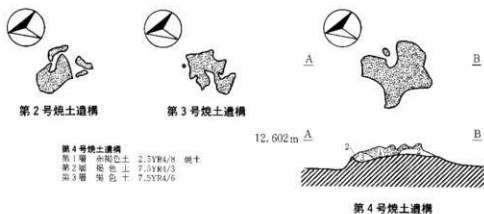
<確認> 黒褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 幅60～120cm、深さ20～30cm、26mほどの長さを検出した。多少の蛇行が見られるがほぼ1直線に構築されており、東端及び西端は調査区域外にさらに延びているものと思われる。



第22図 第1号石組炉及び第1号焼土遺構



第23図 烧土遺構

<壁> ゆるやかに立ち上がる。

<底面> やや凸凹としており、全体的に西側に傾斜している。

<堆積土> 2層に分層された。黒褐色土主体である。

<出土遺物> 覆土から蔽石1点が出土した。両端に蔽打痕があり、石質は安山岩である。

第2号溝跡 (第24図・第25図)

<位置> B区B-10-D-8グリッドにかけて位置している。

<確認> 暗褐色土の落ち込みとして確認した。

<重複> なし。

<規模・形状> 幅70～160cm、深さ20～40cm、17.2mほどの長さを検出した。全体的にはほぼ1直線に構築されており、北端は調査区域外にさらに延びているものと思われる。また、北端付近の溝跡の壁際では、雑多な形状を呈した数本の木材がほぼ直立した状態で検出されたが、渡し板を固定するための施設と考えられる。この場合、近・現代に構築された溝跡である可能性が高い。

<壁> ゆるやかに立ち上がるが、第1号溝跡の壁と比較して、やや急である。

<底面> ほぼ平坦であり、全体的に南側に傾斜している。

<堆積土> 3層に分層された。暗褐色土主体である。

<出土遺物> 縄文時代後期の土器片多数と珪質頁岩製の不定形石器1点、肥前Ⅲ～Ⅳ期の碗の口縁部1点が出土している。

第3号溝跡 (第24図)

<位置> B区B・C-8グリッドに位置している。

<重複> なし。

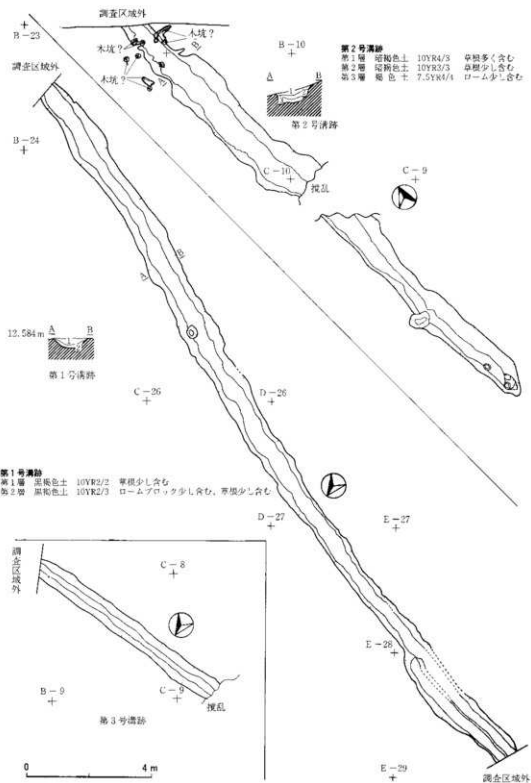
<規模・形状> 幅60～75cm、深さ20～45cm、6.9mほどの長さを検出した。全体的にはほぼ1直線に構築されており、東端は調査区域外にさらに延びているものと思われる。西端は攪乱で途切れており、その続きは検出されなかった。

<壁> 立ち上がりが急であり、断面はほぼV字形を呈する。

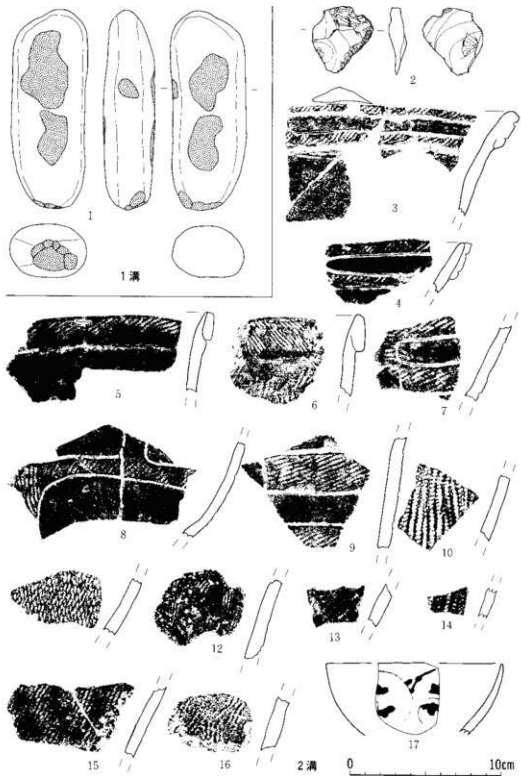
<底面> 全体的に西側に傾斜している。

<出土遺物> なし。

(相澤 治)



第24図 溝跡(1)



第25圖 溝跡(2)

第2節 遺構外の出土遺物

平成4年度の調査では、土器・石器等の遺物が段ボール箱で約3箱分、平成5年度の調査では約24箱分出土した。その大半が、遺構外から出土した遺物である。

(1) 土器 (第26図～第40図)

本遺跡から出土した土器は、主に縄文時代の土器で、平成4年度、5年度ともに後期の十腰内式の土器が主体を占める。これらの出土土器のうち、遺構外から出土した土器を大まかに時期ごとに群別し、さらに各群中において型式により細分した。土器観察表は55～59頁に示した。

第Ⅰ群土器—縄文時代早期 第Ⅱ群土器—縄文時代前期 第Ⅲ群土器—縄文時代中期
第Ⅳ群土器—縄文時代後期 第Ⅴ群土器—縄文時代晩期 第Ⅵ群土器—弥生時代前期

第Ⅰ群土器 (第26図1～11)

縄文時代早期の土器を一括した。いずれも平成5年度の調査区域(B区)から若干出土しており、全体形を把握できないような口縁部と胴部の細片のみである。以下のように分類した。

- 1類 吹切沢式に比定されるもの(1・3～5・7) 4は貝殻腹縁連続波状文(または刺突文)を施す。7は外面に丸い棒状工具による刺突文、内面に貝殻腹縁文を持つ。
- 2類 蛭沢AⅡ式に比定されるもの(2・6・10・11) 2は貝殻腹縁刺突文及び沈線文、刻目状刺突文を有する。6は鋸歯状に貝殻腹縁文を施した間に円形刺突文を施す波状の口縁部である。10・11は山形文と丸い棒状工具による刺突文を有する。
- 3類 その他の早期の土器(8・9) 両者とも外面の摩滅が著しく、内面に条痕を持つ。

第Ⅱ群土器 (第26図13～18)

縄文時代前期の土器を一括した。ほとんど平成5年度の調査区域(B区)から、若干出土している。13～15は円筒下層d式に比定されるもので、15は隆帯上にLR押圧文を施文している。16・18は、ともに多軸絡条体による燃糸文を土器の底部に施文された、前期のものと思われる破片である。

第Ⅲ群土器 (第26図12、第27図19～第28図33)

縄文時代中期の土器を一括した。ほとんど平成5年度の調査区域(B区)から、若干出土している。以下のように分類した。

- 1類 円筒上層a式に比定されるもの(19) 口縁部の地文に燃糸圧痕文を施している。
- 2類 円筒上層e式以降と思われるもの(25・28・29) 口唇部に刻み・刺突を持つ3点。
- 3類 椀林式に比定されるもの(21・22・24・26・31・33) 渦巻のモチーフを多用。

- 4類 中期末葉の土器 (32) 細めの二重沈線で、地文上に弧状文を連続させている。
 5類 その他の中期の土器 (12・20・23) 12は、円筒上層式の口縁部文様帯であろう。

第Ⅳ群土器 (第29図～第38図)

縄文時代後期の土器を一括した。平成4年度の調査区域(A区)、及び平成5年度の調査区域(B区)ともに、この時期の土器が出土遺物の主体をなしている。以下のように分類した。

- 1類 牛ヶ沢式に比定されるもの 90は、隆線を貼付した甕棺土器の一部と思われる。
 2類 沖附式に比定されるもの 波状口縁の94、コ状文の109、渦巻文を施す130の3点。
 3類 弥栄平(2)式に比定されるもの (93・96・97・99・105・106・110・114・118) 106・118は、縄文地に逆S字状文を施す。93・96・114は折り返し口縁で隆帯を形成する。99以外のすべての口縁部破片は、口唇部端を鉋状工具で円形に整えている。
 4類 十腰内Ⅰ式に比定されるもの 平成5年度の調査区域(B区)で最も多く出土した遺物で、平成4年度の調査区域(A区)でも若干出土した。さらに以下のように細分した。
- 4a類 円形文または楕円形文を有するもの
- ・粘土紐の貼付によるもの (61・64・67・68・70・82) 70は逆S字状貼付も有する。
 - ・磨消縄文手法によるもの……区画内を磨消したもの (41・121・126)
 - 区画線を深く刻んだもの (104・108)
 - ・沈線によるもの (38・51～54・59・63・66・71・74・84) 66は粘土貼付、84は格子目状文を組み合わせて施文している。59は文様がやや退化した様相を示す。
- 4b類 網目状襷糸文または格子目状文を有するもの
- ・網目状襷糸文を有するもの (37・120・122・123)
 - ・格子目状文を有するもの (57・81・83) 83は2条単位の格子目状文を有する。
- 4c類 渦巻文を有するもの (56・72・73・76・88・89) 56は貼付隆帯が剥離。
 4d類 多条沈線による弧状文または不規則な条文を有するもの
- ・弧状文を有するもの (40?・58・62?・79・80?・91・98)
 - ・不規則な条文を有するもの (39・77・78・111)
- 4e類 平行沈線文と弧状区画文・縦波状文を有するもの (50・55・75) 50・75は平行沈線文と弧状区画文、55はそれに加えて縦波状文の施文がなされている。
 4f類 平行沈線文を有するもの (44・45・47～49・100・155) 45・47は沈線上に穿孔を有し、100・155は地文の縄文上に平行沈線文が施されている。
 5類 十腰内Ⅲ式に比定されるもの 平成4年度の調査区域(A区)で多く出土している。刻目列のあるもの (137・160～163・170)、磨消縄文で鍵状文を施したものの (131・141・169)、かなり入念に磨消部分を調整したものの (138)が見られる。134は刻目列を有し、

かつ磨消による鍵状文を施す、ほぼ完全に復原された深鉢形土器である。

6類 十腰内Ⅳ式に比定されるもの 平成4年度・平成5年度ともに出土が若干見られる。

164・165・166は、波状口縁で刻目列を有する。132・136は、磨消による無文帯を口縁部に持つ深鉢形土器の破片と考えられる。

7類 十腰内Ⅴ式に比定されるもの 平成4年度・平成5年度ともに、若干出土している。

146と147は貼瘤を有する胴部破片である。167・168は、波状口縁の波頭部に縄文帯を有する。長頸壺の口縁部(145)、羽状縄文施文の粗製土器(152・171・177)も含む。

8類 どの型式にも積極的に分類し得なかった後期の土器

8a類 口縁部 34・35・65・69・87・95・101～103・112・113はすべて波状口縁であり後期初頭～前葉のものと思われる。46・60・119は十腰内Ⅰ式の可能性を持つものである。口唇に刻みを有する突起を持つ151・172は十腰内Ⅴ式以降のものか。その他、無文の36、縄文施文の124・125・128・150(穿孔)・157(沈線)を当類に含む。

8b類 胴部・底部・注口部 135・139・140・142～144(注口部)・158・173・174・176は後期末葉のものか。その他、42・43・85・86・92・107・115～117・127・129・133(注口部)・148(注口部)・149・154(木葉底)・175を当類に含む。

第Ⅴ群土器(第36図～第39図)

縄文時代晩期の土器を一括した。ごく少数の出土である。大淵A'式に比定されるもの(188・189・191・194)と、その他の晩期の土器(153・156・159・178)に大別される。

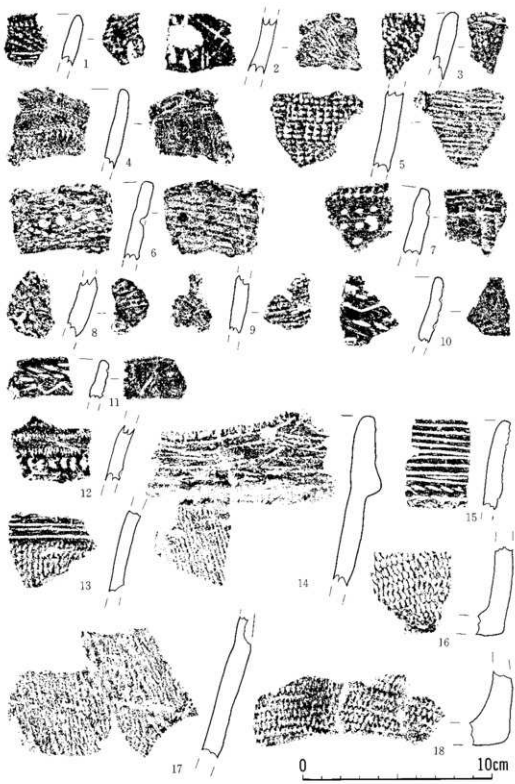
第Ⅵ群土器(第38図～第40図)

弥生時代前期の土器を一括した。数点を除き、平成5年度の調査区域(B区)からの出土である。熊野川をすぐ近くに臨む東側段丘斜面からの出土が多い。器種は、鉢、浅鉢、台付鉢、甕、壺、高坏等が見られるが、破片資料が大部分である。ほとんどのものが、施文後にミガキをかけて調整される。以下のように分類した。

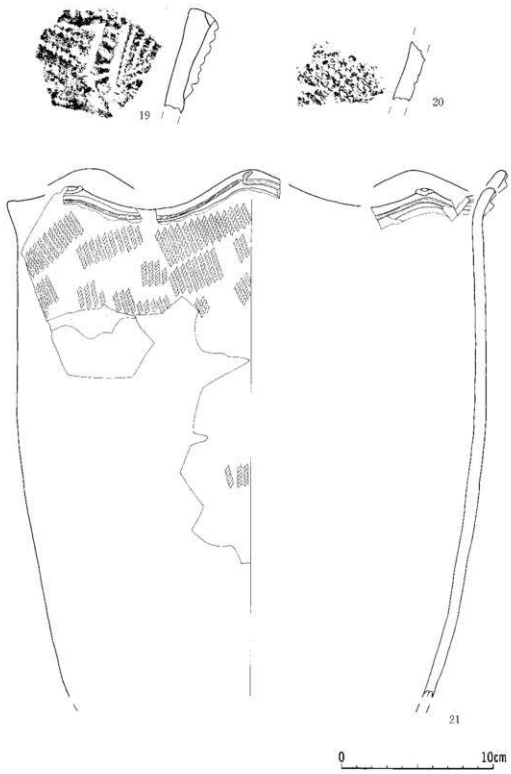
1類 砂沢式に比定されるもの、及び二枚橋式以前と思われるもの(180～182・184・185・192・193・195～198・202～204・215・216・218) 185は胎土が良好で、砂沢式の範囲に入る。181・184・195・196はいわゆる五所式に類似するものである。

2類 二枚橋式に比定されるもの(179・183・186・187・190・199～201・205～214・217) 口縁部では、R L縄文原体を横位回転させ、頸部以外では縦走縄文を施したものが多い。結節沈線を施文したもの(187・205・209・210・214)も見られる。

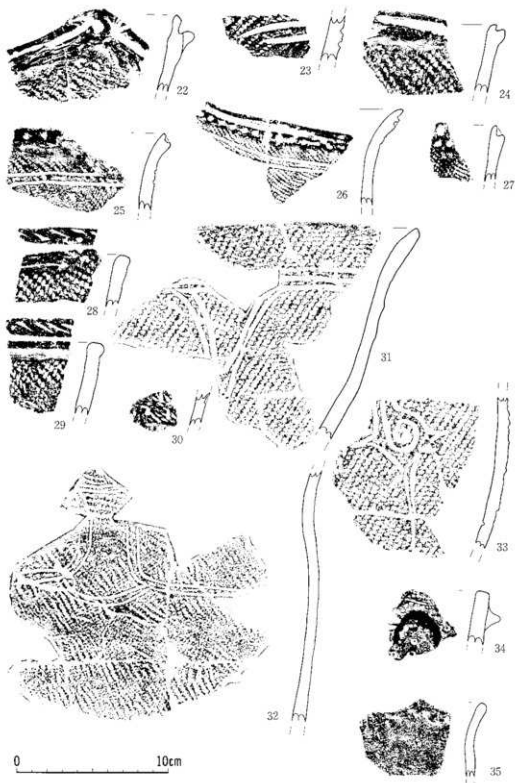
(相澤 治)



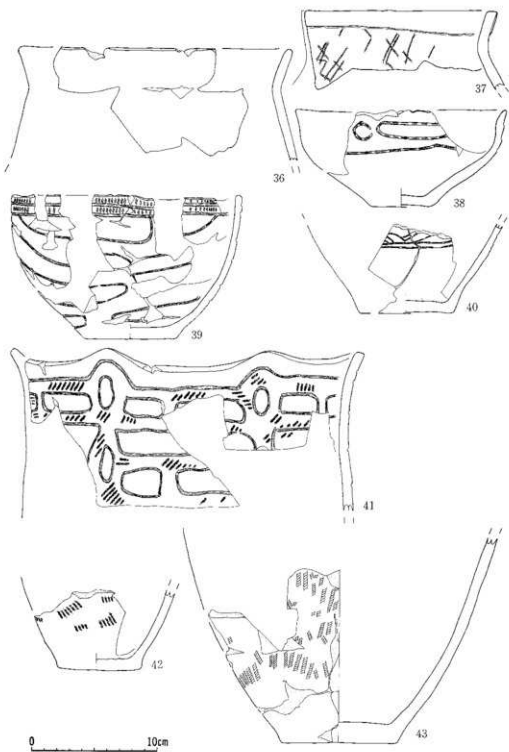
第26图 遺構外出土遺物(土器 1)



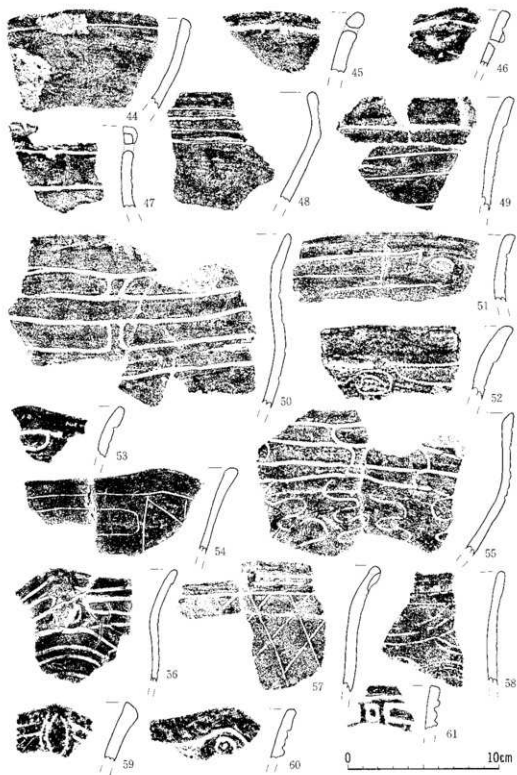
第27図 遺構外出土遺物(土器 2)



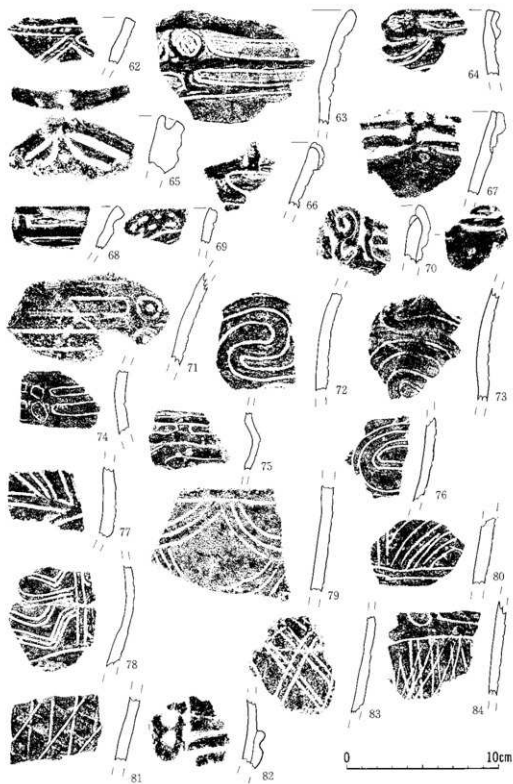
第28图 遗構外出土遺物（土器 3）



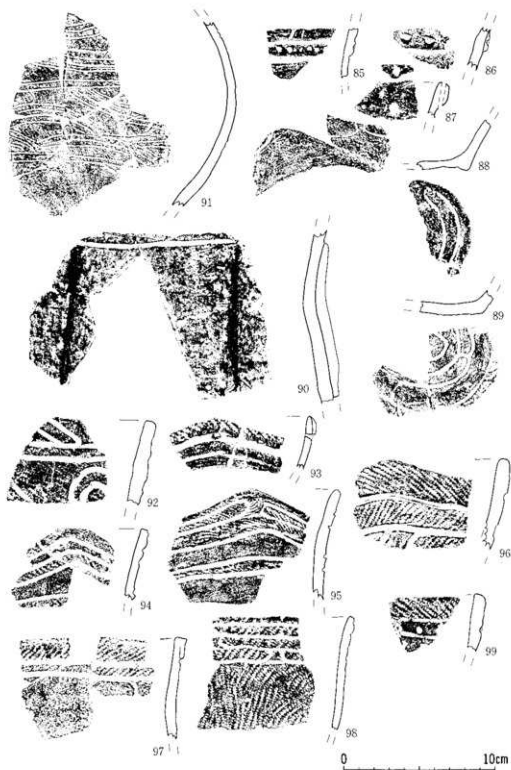
第29図 遺構外出土遺物（土器 4）



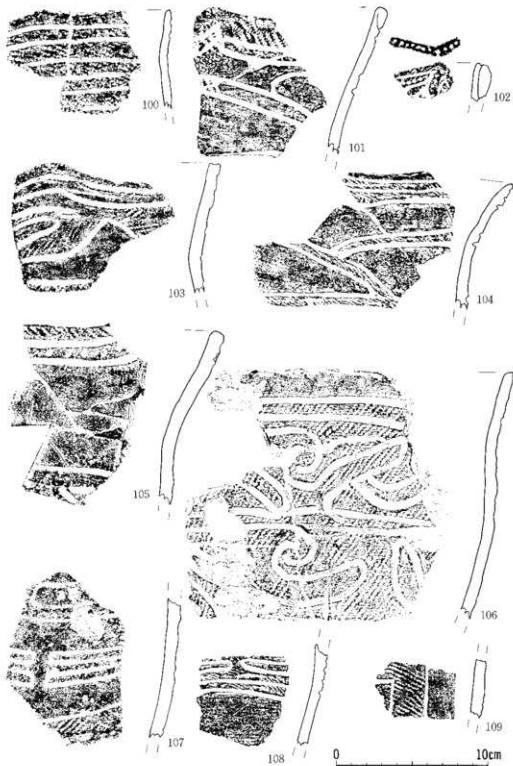
第30图 遺構外出土遺物（土器 5）



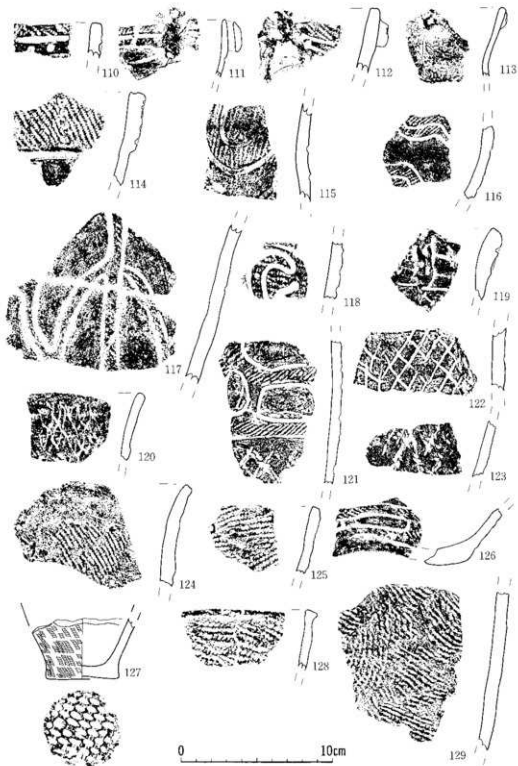
第31图 遺構外出土遺物(土器 6)



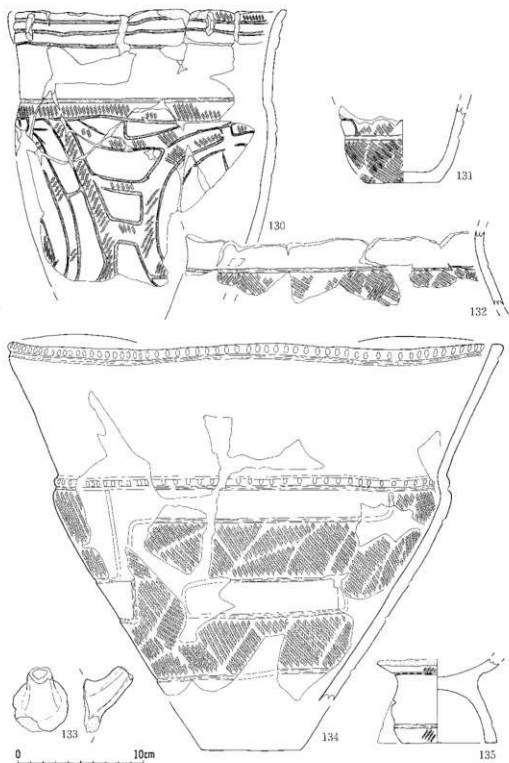
第32图 遗物出土物 (土器 7)



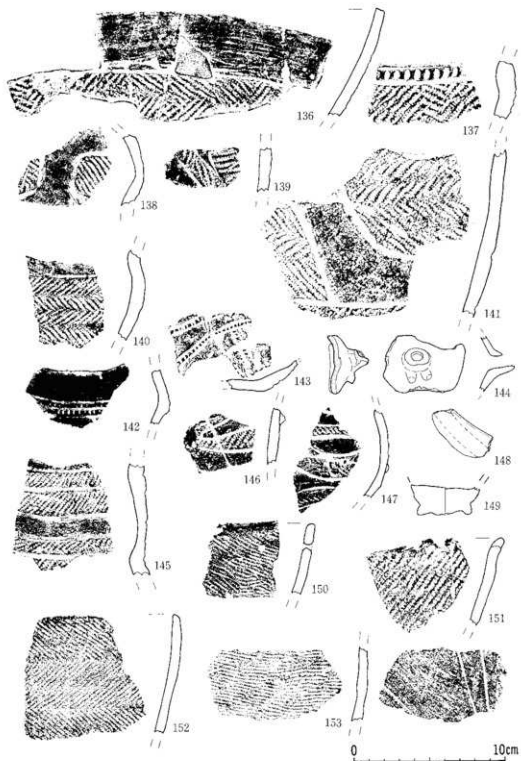
第33图 遗冢外出土遗物(土器 8)



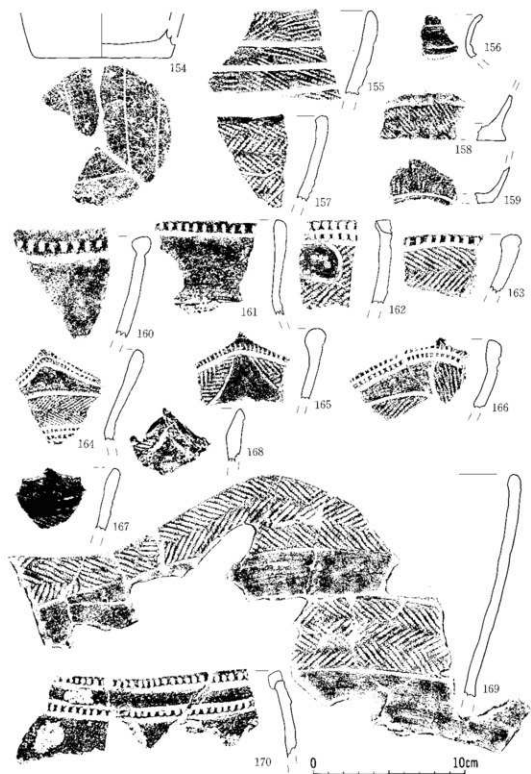
第34图 遺構外出土遺物(土器 9)



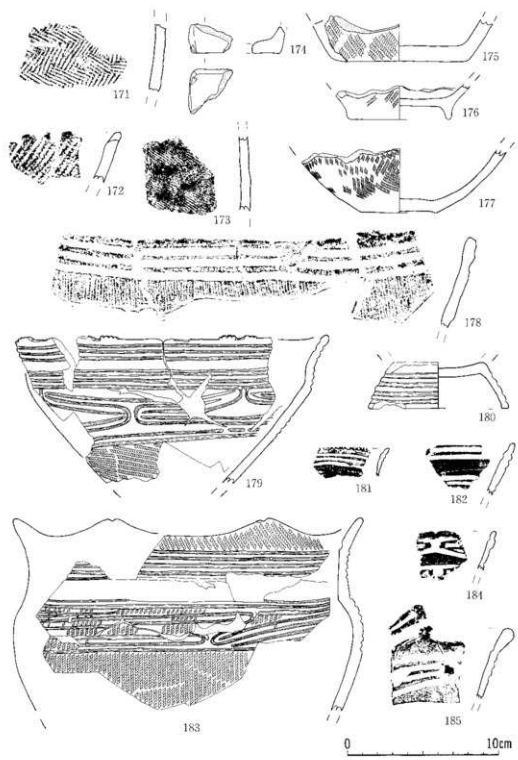
第35图 遺構外出土遺物(土器 10)



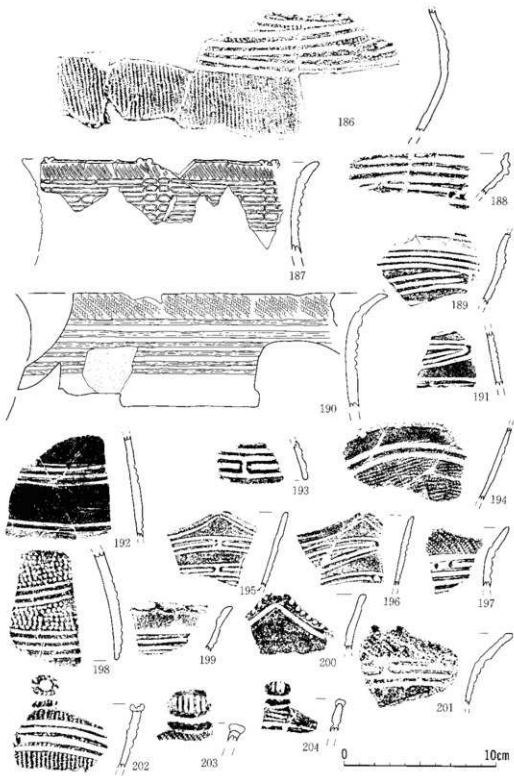
第36圖 遺構外出土遺物（土器 11）



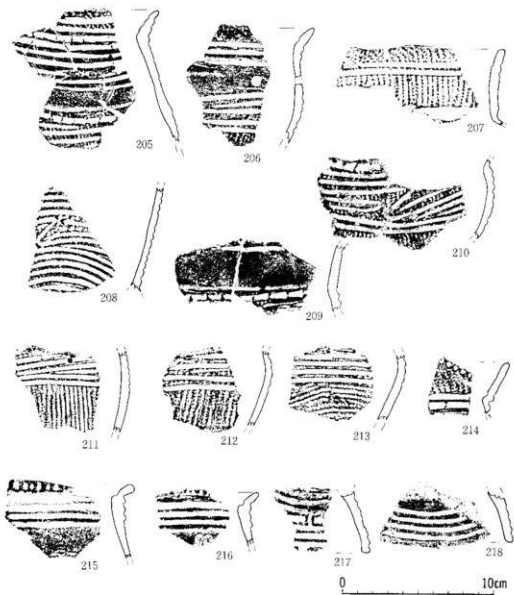
第37图 遺構外出土遺物(土器 12)



第38图 造桥外出土遗物（土器 13）



第39图 遗物出土土器 (土器 14)



第40图 濠横外出土遗物 (土器 15)

遺構外出土土器観察表(1)

図版番号	出土地点	層	部位	外面	施文文様	備考	分類
26図-1	B・B-22	I・II	縁部	貝殻緑文、沈線文			I-1
26図-2	B・D-29	I・II	胴部	刻目状刺突文、沈線文、貝殻緑刺突文		内面条痕文	I-2
26図-3	B・B-25	II	口縁部	貝殻緑文			I-1
26図-4	B・E-32	III	口縁部	貝殻緑帯流状文		内面沈線文?	I-1
26図-5	B・D-27	III	胴部	貝殻緑押引文		内面条痕文	I-1
26図-6	B・C-29	II・III	口縁部	円形刺突文、刺突状貝殻緑文		内面条痕文	I-2
26図-7	B・B-20	I・II	口縁部	円形刺突文		内面貝殻緑文	I-1
26図-8	B・C-28	I・II	胴部	(摩滅著しい)		内面条痕文	I
26図-9	B・B-30	III	胴部	(摩滅著しい)		内面条痕文	I
26図-10	B・E-31	I・II	口縁部	刻目状刺突文、刺突状(山形)沈線文			I-2
26図-11	B・E-32	III	口縁部	刻目状刺突文、刺突状(山形)沈線文			I-2
26図-12	B・B-25	III	口縁部	燕糸口縁、刻目状刺突文			III
26図-13	B・C-21	I・II	口縁部	R圧痕、燕糸文			II
26図-14	B・D-17	I・II	口縁部	R圧痕による刻目、R圧痕、燕糸、燕糸文			II
26図-15	B・D-14	I・II	口縁部	R圧痕、L R圧痕			II
26図-16	B・C-16	I・II	底部	燕糸文			II
26図-17	B・D-17	I・II	胴部	燕糸文			II
26図-18	B・C-19	I・II	底部	燕糸文		赤径多く含む	II
27図-19	B・C-30	I・III	口縁部	燕糸圧痕、降着に燕糸圧痕による刻目		縦線含む	III-1
27図-20	B・C-30	III	胴部	L R L 縄文			III
27図-21	B・C-18	I・II (深縁)	口縁部	波状口縁、口唇沈線(波頭部凸出)、R L 縄文			III-3
28図-22	B・B-21	I・II	口縁部	波状口縁、口唇沈線(波頭部凸出)、R L 縄文			III-3
28図-23	B・E-28	I・II	胴部	R L 縄文に凹線			III
28図-24	B・E-31	III	口縁部	波状口縁、彫削口縁に凹線、R L 縄文		内面ナデ?	III-3
28図-25	B・C-19	I・II	口縁部	平口縁、口唇凹形刺突、平行沈線、L R 縄文			III-2
28図-26	B・D-18	I・II	口縁部	口唇に凹線・円形刺突、沈線文、R L 縄文			III-3
28図-27	B・C-18	I・II	口縁部	口唇凹形刺突、R L 縄文			III
28図-28	B・D-29	II・III	口縁部	平口縁、口唇凹位の短沈線、沈線、R L 縄文			III-2
28図-29	B・D-29	II・III	口縁部	平口縁、口唇凹位の短沈線、沈線、R L 縄文		内面沈線	III-2
28図-30	B・C-15	I・II	胴部	刻目状刺突文			III
28図-31	B・D-19	I・II	口縁部	平口縁、L R L 縄文に楕円形文(沈線)		33と同一体	III-3
28図-32	B・C-19	I・II	口縁部	R L 縄文に弧状文			III-4
28図-33	B・D-19	III	胴部	平口縁、L R L 縄文に渦巻文(沈線)		31と同一体	III-3
28図-34	B・C-19	III	口縁部	進目字状貼付痕跡、刺突文			III-4
28図-35	B・D-30	III	口縁部	波状口縁、無文		表面赤化	III-4
29図-36	B・D-28	III	口縁部	無文(内外面ともに横方向にミガキ)			IV
29図-37	B・D-30	III	口縁部	折返し口縁、刻目状燕糸文			IV-1
29図-38	B・C-27	I・II	(浅縁)	沈線区画文、沈線文			IV-4
29図-39	B・C-29	III	(鉢)	口縁部隆起にL R 縄文・平行沈線、沈線文		111と同一体	IV-4
29図-40	B・C-27	I・II	底部	斜状沈線、平行沈線、底部ミガキ		91と同一体	IV-1
29図-41	B・D-29	III	口縁部	波状口縁、沈線区画文、岩酒、L 縄文			IV-4
29図-42	B・C-29	I・II	底部	L 縄文			IV
29図-43	B・C-18	I・II	(深縁)	R L 縄文			IV
30図-44	B・C-27	III	口縁部	沈線文、内外面ミガキ			IV-4
30図-45	B・C-29	III	口縁部	沈線文、穿孔			IV-4
30図-46	B・B-26	I・II	口縁部	波状口縁、貼付隆起、穿孔			B

遺構外出土土器観察表(2)

図録番号	出土地点	層	部位	外面施文文様	備考	分類
30図-47	B・D-17	I・II	口縁部	平行沈線、穿孔		IV-4
30図-48	B・E-31	I・II	口縁部	平行沈線、ミガキ		IV-4
30図-49	B・D-30	III	口縁部	折返口縁、平行沈線、ミガキ		IV-4
30図-50	B・E-25	III	口縁部	沈線区画文、ミガキ		IV-4
30図-51	B・C-26	I・II	口縁部	沈線区画文、沈線文、ミガキ	区画内赤彩?	IV-4
30図-52	B・D-30	III	口縁部	沈線区画文、ミガキ		IV-4
30図-53	B・D-30	III	口縁部	波状口縁、沈線区画文内に赤色粘土貼付		IV-4
30図-54	B・D-29	III	口縁部	波状口縁、沈線区画文		IV-4
30図-55	B・E-27	I・II	口縁部	沈線区画文、曲線文、ミガキ	スス状炭化物付着	IV-4
30図-56	B・C-30	III	口縁部	波状口縁、沈線区画文・曲線文、貼付?		IV-4
30図-57	B・E-31	I・II	口縁部	平行沈線、隆帯、割目状沈線、赤色粘土貼付		IV-4
30図-58	B・C-26	I・II	口縁部	沈線曲線文	スス状炭化物付着	IV-4
30図-59	B・C-26	II・III	口縁部	波状口縁、沈線文		IV-4
30図-60	B・D-30	III	口縁部	波状口縁、沈線区画文・曲線文、刺突文		IV
30図-61	B・E-30	I・II	口縁部	沈線区画文(隆沈線文的)		IV-4
31図-62	B・E-24	I・II	口縁部	沈線文		IV-4
31図-63	B・D-29	II・III	口縁部	波状口縁、沈線区画文内ミガキ	スス状炭化物付着	IV-4
31図-64	B・C-27	III	口縁部	膨隆口縁ミガキ、沈線区画文・曲線文		IV-4
31図-65	B・E-29	I・II	口縁部	膨隆口縁、円錐状刺突、沈線区画文、刺突文		IV
31図-66	B・D-31	I・II	口縁部	波状口縁、波瀬部隆帯、刺突、沈線区画文		IV-4
31図-67	B・D-19	I・II	口縁部	隆線文、沈線文		IV-4
31図-68	B・E-25	I・II	口縁部	折返口縁、沈線区画文、ミガキ	赤彩?	IV-4
31図-69	B・E-30	I・II	口縁部	波状口縁、斜突列、沈線文		IV
31図-70	B・E-22	III	口縁部	波状口縁、波瀬部逆S字状粘土層貼付、沈線	内面沈線	IV-4
31図-71	B・D-30	III	胴部	沈線区画文、刺突文		IV-4
31図-72	B・D-29	I・II	胴部	沈線曲線文(渦巻文)	区画内赤彩?	IV-4
31図-73	B・D-29	III	胴部	沈線曲線文(渦巻文)	区画内赤彩?	IV-4
31図-74	B・E-29	III	胴部	沈線区画文		IV-4
31図-75	B・C-29	III	口縁部	沈線区画文		IV-4
31図-76	B・D-29	II・III	胴部	沈線曲線文(渦巻文)		IV-4
31図-77	B・5区EA	I	胴部	沈線文		IV-4
31図-78	B・D-30	III	胴部	沈線文		IV-4
31図-79	B・C-29	II・III	胴部	沈線曲線文(弧状文)		IV-4
31図-80	B・D-29	III	胴部	沈線曲線文		IV-4
31図-81	B・E-28	I・II	胴部	沈線文(格子状文)		IV-4
31図-82	B・D-19	I・II	口縁部	隆線文、沈線区画文		IV-4
31図-83	B・E-29	III	胴部	沈線文(格子状文)		IV-4
31図-84	B・D-29	III	口縁部	沈線区画文、沈線文(格子状文)	赤彩?	IV-4
32図-85	B・E-27	I・II	胴部	貼付隆帯に割目状刺突		IV
32図-86	B・E-26	I・II	口縁部	貼付隆帯に割目状刺突		IV
32図-87	B・C-29	I・II	口縁部	口唇貼付部分に縦に穿孔		IV
32図-88	B・E-27	I・II	底部	沈線区画文・曲線文		IV-4
32図-89	B・C-30	III	底部	沈線区画文・曲線文		IV-4
32図-90	B・D-29	I・II	胴部	垂下隆線、沈線文、ミガキ	雲格の一部	IV-4
32図-91	B・C-27	I・II	胴部	沈線曲線文(弧状文)	40と同一個体	IV-4
32図-92	B・E-32	III	胴部	沈線区画文・曲線文		IV

遺構外出土土器観察表(3)

図版番号	出土地点	層	部位	外面	施文	文様	備考	分類
32図-93	B・D-30	Ⅲ	口縁部	波状・折返口縁	R L 縄文、沈線文、穿孔			B-3
32図-94	B・E-31	I・II	口縁部	波状口縁	沈線文、R L 充填縄文、ミガキ			B-2
32図-95	B・B-24	I・II	口縁部	波状口縁	沈線区画、R L 充填縄文、ミガキ			IV
32図-96	B・D-28	Ⅲ	口縁部	波状口縁	R L 縄文 (0段多条?)、沈線文			B-3
32図-97	B・C-28	I・II	口縁部	折返口縁、平行沈線、L R 縄文、ミガキ				B-3
32図-98	B・D-29	Ⅲ	口縁部	沈線区画文、L R 縄文				B-4
32図-99	B・D-30	I・II	口縁部	沈線文、R L 縄文、竹管状刺突				B-3
33図-100	B・C-30	Ⅲ	口縁部	波状口縁	L R 縄文、多条沈線			B-4
33図-101	B・D-29	I・II	口縁部	波状口縁、沈線区画、R L (0段多条)、磨消				IV
33図-102	B・D-24	I・II	口縁部	波状口縁	L R 縄文、沈線、口唇口縁に刺突			IV
33図-103	B・E-31	I・II	口縁部	波状口縁	L R 縄文磨消、沈線、波頭部刺突			IV
33図-104	B・B-24	I・II	口縁部	波状口縁	L R 縄文、沈線区画文・垂線文			B-4
33図-105	B・C-19	I・II	口縁部	沈線文、R L 縄文、竹管状刺突		110と同一個体		B-3
33図-106	B・C-30	Ⅲ	口縁部	R L 縄文、沈線曲線文				B-3
33図-107	B・E-31	I・II	胴部	沈線区画文、R L 縄文		スス状炭化物付着		B
33図-108	B・B-24	I・II	口縁部	R L 縄文、沈線区画文				B-4
33図-109	B・C-11	I・II	胴部	沈線文、L R 充填縄文、磨消				B-2
34図-110	B・D-19	Ⅲ	口縁部	沈線文、R L 縄文、竹管状刺突		105と同一個体		B-3
34図-111	B・C-20	Ⅲ	口縁部	口唇貼付部分に縦に穿孔、沈線、L R 縄文		30と同一個体		B-4
34図-112	B・D-30	I・II	口縁部	進上字状沈線、R L 縄文、竹管状刺突				IV
34図-113	B・D-30	Ⅲ	口縁部	波状口縁、ボタン状貼付	R L 縄文、磨消			B
34図-114	B・C-30	I・II	口縁部	沈線、R L 縄文 (0段多条)、竹管状刺突列				B-3
34図-115	B・E-21	I・II	頸部	R L 縄文、沈線曲線文、磨消				B-5
34図-116	B・D-30	Ⅲ	胴部	L R 縄文、沈線曲線文、磨消				B
34図-117	B・C-27	Ⅲ	胴部	沈線曲線文、L R 充填縄文、磨消		スス状炭化物付着		IV
34図-118	B・C-29	Ⅲ	胴部	L R 縄文、沈線曲線文 (渦巻文)、磨消				B-3
34図-119	B・C-27	I・II	口縁部	波頭部鉤状縁帯貼付、沈線文、網目状熱糸文				B-4
34図-120	B・C-30	Ⅲ	口縁部	折返口縁、網目状熱糸文		スス状炭化物付着		B-4
34図-121	B・D-29	Ⅲ	胴部	沈線区画、L 縄文磨消、特殊な網目状熱糸文		スス状炭化物付着		B-4
34図-122	B・B-15	I・II	胴部	網目状熱糸文				B-4
34図-123	B・D-29	Ⅲ	胴部	網目状熱糸文				B-4
34図-124	B・E-26	I・II	口縁部	L R 縄文		スス状炭化物付着		B
34図-125	B・B-19	I・II	口縁部	L R 縄文				B
34図-126	B・B-30	Ⅲ	底部	沈線区画文、L R 縄文、磨消				B-4
34図-127	B・D-26	I・II	底部	L R 縄文、底部網代痕				B
34図-128	B・D-29	Ⅲ	口縁部	膨隆口縁、L R 縄文				IV
34図-129	B・B-25	Ⅲ	胴部	L 縄文男方向から施文				B
35図-130	B・D-31	Ⅲ	(深鉢)	降帯、沈線、沈線区画文・磨消文、R L 充填				B-2
35図-131	A・D-63	Ⅲ	底部	R L 縄文 (0段多条)、沈線区画文、磨消				B-5
35図-132	B・C-17	I・II	頸部	沈線文、羽状縄文 (0段多条)、ミガキ				B-6
35図-133	A・E-58	Ⅲ	注1部	(注1部内部を板状工具で調整)				B
35図-134	A・B-60	I	(深鉢)	口唇・唇部に刺突、R L 縄文、沈線区画文				B-5
35図-135	A・D-37	Ⅲ	台座	沈線文、R L・L R 充填縄文、ミガキ				B
36図-136	B・C-17	I・II	口縁部	ミガキ、沈線、羽状縄文 (0段多条)		内面にスス状炭化物付着		B-6
36図-137	B・D-17	I・II	口縁部	L R 羽状縄文 (0段多条)、沈線、刺突縁帯				B-5
36図-138		Ⅲ	胴部	R L 縄文 (0段多条)、沈線、磨消				B-5

遺構外出土土器観察表(4)

図版番号	出土地点	層	部位	外 面 施 文 文 様	備 考	分類
36図-139	B・E-21	I・II	胴部	異方向からR.L.(0段多条)、沈線文、磨消		B
36図-140	A・E-53	II	胴部	羽状縄文(0段多条)、沈線文、ミガキ	内面横ナギ	B
36図-141	A・B-60	II	胴部	羽状縄文(0段多条)、沈線文、磨消		IV-5
36図-142	A・E-57	II	口縁部	平行沈線、斜目隆線、ミガキ	143と同一個体	B
36図-143	A・E-57	II	底部	沈線間に斜目、ミガキ	142と同一個体	B
36図-144	A・B-63	II	注口部	注口部下に2個1対の貼輪、ミガキ		B
36図-145	A・E-50	I	頸部	平行沈線、L.R縄文、磨消	長頸帯	B-7
36図-146	B・B-20	I・II	胴部	R.L.(0段多条)、沈線曲線文、磨消、貼輪		B-7
36図-147	B・B-24	I・II	胴部	R.L縄文、沈線曲線文、磨消、貼輪	底	B-7
36図-148	A・E-47	II	注口部	無文		B
36図-149	B・D-31	III	底 面	揚底気味、無文		B
36図-150	A・B-62	I	口縁部	R.L縄文、穿孔		B
36図-151	A・B-59	II	口縁部	11毎部に2個の突起、R.L縄文	172と同一個体	B
36図-152	A・C-62	II	口縁部	羽状縄文(0段多条)	スズ状炭化物付着	IV-7
36図-153	A・D-46	II	胴部	R.L縄文	内面沈線	V
37図-154	B・D-17	I・II	底 部	木葉痕		B
37図-155	B・D-25	I・II	口縁部	R.LとLの異状縄文、平行沈線		B-4
37図-156	B・C-27	I・II	口縁部	沈線文、ミガキ、内外面に赤色顔料	小型壺	V
37図-157	A・E-57	II	口縁部	口管内厚、羽状縄文(0段多条)、沈線文		B
37図-158	B・D-26	I・II	底 部	L.R縄文アスファルトによる施彫痕		B
37図-159	B・5区PA	I	底 部	沈線文、R.L縄文		V
37図-160	A・B-66	II	口縁部	膨隆口縁、口唇刻目、内外面ミガキ		B-5
37図-161	A・B-65	II	口縁部	沈線文、口唇刻目、内外面ミガキ	壺?	B-5
37図-162	A・E-55	II	口縁部	口管内厚二重刻目、L.R(0多)、沈線、ミガキ	内面スズ状炭化物付着	B-5
37図-163	A・D-37	II	口縁部	口管内厚、沈線文、刻目、羽状縄文(0多)		B-5
37図-164	A・B-65	II	口縁部	沈線文、重刻目、羽状縄文(0多)、磨消		IV-6
37図-165	B・B-23	I・II	口縁部	11唇刻目、沈線、L.R・R.L充然(0多)、磨消	スズ状炭化物付着	B-6
37図-166	A・B-66	II	口縁部	口管内厚二重刻目、沈線文、磨消、L.R(0多)		IV-6
37図-167	A・B-58	II	口縁部	液状口縁、R.L縄文、沈線文、磨消		B-7
37図-168	A・C-52	II	口縁部	液状口縁、11唇隆帯R.L縄文、沈線文、磨消	スズ状炭化物付着	B-7
37図-169	A・D-52	II	口縁部	羽状縄文(0段多条)、沈線文、磨消	スズ状炭化物付着	B-5
37図-170	A・B-66	II	口縁部	口管内厚、唇目隆線2条、沈線文、ミガキ		B-5
38図-171	A・D-52	II	胴部	羽状縄文		B-7
38図-172	A・B-58	II	口縁部	口唇部に3個の突起、R.L縄文	151と同一個体	B
38図-173	A・B-54	II	胴部	R.L縄文		B
38図-174	B・B-20	III	底 部	方形底	小型壺	B
38図-175	A		底 部	R.L縄文		B
38図-176	A・C-63	II	底 部	L.R縄文、揚底		B
38図-177	A・B-65	II	底 部	R.L・L.R縄文(0段多条)、底部何ぞ磨消	壺?	IV-7
38図-178	A・E-65	II	口縁部	条痕、平行沈線	スズ状炭化物付着	V
38図-179	B・D-30	III	(残片)	R.L、沈線、変形I字文、突起刻目、ミガキ	口管内沈線	M-2
38図-180	B・C-39	III	台 座	多条沈線、ミガキ		M-1
38図-181	B・D-30	III	口縁部	平行沈線、口唇刻目、口管内沈線、ミガキ	壺形?	M-1
38図-182	B・B-21	I・II	口縁部	粘土粒、平行沈線、口管内沈線、ミガキ	スズ状炭化物付着	M-1
38図-183	B・D-29	III	口縁部	R.L、沈線、液状I字文、粘土粒、ミガキ	口管内沈線	M-2
38図-184	B・E-26	I・II	口縁部	変形I字文、粘土粒、口管内沈線、ミガキ		M-1

遺構外出土土器観察表(5)

図版番号	出土地点	層	部位	外 面 施 文 文 様	備 考	分類
39図-185	A・D-24	Ⅱ	口縁部	口縁端沈線、変形工字文、粘土粒、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-1
39図-186	B・D-30	Ⅲ	胴 部	R L縦走縄文、波状工字文、ミガキ	スス状美化物付着	Ⅳ-2
39図-187	B・D-30	Ⅲ	口縁部	R L、多条沈線、結節沈線、突起、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-2
39図-188	B・C-17	I・Ⅱ	口縁部	工字文、平行沈線、ミガキ、口唇内沈線	台付浅鉢、赤彩?	V
39図-189	B・E-31	Ⅲ	胴 部	平行沈線、変形工字文、ミガキ	胎土良好	V
39図-190	B・C-31	Ⅱ	口縁部	R L縄文、多条沈線、ミガキ、口唇内沈線		Ⅳ-2
39図-191	B・C-17	I・Ⅱ	胴 部	変形工字文、粘土粒、ミガキ	胎土良好	V
39図-192	B・D-20	I・Ⅱ	高坏部	平行沈線、ミガキ		Ⅳ-1
39図-193	B・D-30	I・Ⅱ	台 部	平行沈線、工字文、ミガキ		Ⅳ-1
39図-194	B・C-17	I・Ⅱ	胴 部	L R横走縄文、平行沈線、ミガキ	胎土粗悪	V
39図-195	B・D-29	Ⅲ	口縁部	波頭部2又状、工字文、ミガキ、口唇内沈線	196と同一個体	Ⅳ-1
39図-196	B・D-29	Ⅲ	口縁部	波頭部2又状、変形工字文、ミガキ、粘土粒	赤彩?	Ⅳ-1
39図-197	B・D-30	Ⅲ	口縁部	平行沈線、2個1対の粘土粒、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-1
39図-198	B・D-18	Ⅲ	高坏部	波状文?、充填刺突、ミガキ		Ⅳ-1
39図-199	B・B-20	I・Ⅱ	口縁部	小波状口縁、R L横走、平行沈線、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-2
39図-200	B・D-29	Ⅱ・Ⅲ	口縁部	波頭部2又状、口唇刻目、沈線、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-2
39図-201	B・C-18	I・Ⅱ	口縁部	波頭部2又状、工字文、平行沈線	口唇内沈線	Ⅳ-2
39図-202	B・C-32	I・Ⅱ	口縁部	波頭部に突起、R L縦走縄文、沈線、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-1
39図-203	B・E-29	I・Ⅱ	口縁部	波頭部に突起、R L縄文、ミガキ		Ⅳ-1
39図-204	B・B-20	Ⅲ	口縁部	波頭部に突起、R L横走縄文、沈線文	口唇内沈線	Ⅳ-1
40図-205	B・D-31	Ⅲ	口縁部	多条沈線、結節沈線、ミガキ	口唇内沈線3	Ⅳ-2
40図-206	B・B-23	Ⅱ・Ⅲ	口縁部	R L縄文、多条沈線、ミガキ、穿孔	口唇内沈線	Ⅳ-2
40図-207	B・C-30	I-Ⅲ	口縁部	R L縄文、沈線文、口唇内沈線	内外面ミガキ	Ⅳ-2
40図-208	B・D-30	Ⅲ	底 部	多条沈線、波状工字文、充填刺突、ミガキ	台付?	Ⅳ-2
40図-209	B・D-30	Ⅲ	胴 部	平行沈線、結節沈線、ミガキ	内面ミガキ?	Ⅳ-2
40図-210	B・D-31	Ⅲ	胴 部	R L縦走、多条・結節沈線、波状工字文	ミガキ	Ⅳ-2
40図-211	B・E-29	I・Ⅱ	口縁部	R L縦走縄文、多条沈線、沈線内粘土粒貼付		Ⅳ-2
40図-212	B・B-23	Ⅱ・Ⅲ	胴 部	R L縦走縄文、多条沈線、ミガキ	内外面にスス状美化物付着	Ⅳ-2
40図-213	B・B-20	I・Ⅱ	胴 部	R L横走縄文、多条沈線、ミガキ	内外面にスス状美化物付着	Ⅳ-2
40図-214	B・D-29	Ⅲ	口縁部	R L、口唇刻目、沈線、結節沈線、ミガキ	口唇内沈線	Ⅳ-2
40図-215	B・D-17	I・Ⅱ	口縁部	口唇刻目、多条沈線、ミガキ、口唇内沈線		Ⅳ-1
40図-216	B・B-20	I・Ⅱ	口縁部	口唇刻目、多条沈線、ミガキ、口唇内沈線		Ⅳ-1
40図-217	B・D-29	Ⅱ・Ⅲ	台 部	多条沈線、工字文、ミガキ		Ⅳ-2
40図-218	B・D-30	Ⅲ	台 部	多条沈線、ミガキ		Ⅳ-1

※本文中と表中の分類の表記を、一部変更している。(I群3類→I、Ⅲ群5類→Ⅲ、Ⅳ群8類→Ⅳ)

(2) 石器 (第41図～第48図)

本遺跡の縄文時代の石器は、石鏃・石槍・石錐・石匙・石鏡・不定形石器・磨製石斧・打製石斧・敲磨器類・石皿・石錘等が出土している。これらのうち、遺構外から出土したものを器種毎に分類し、さらに形態により次のように細分した。石器観察表は70～71頁に示した。

石鏃 (第41図1～10) 25点。石質は、珪質頁岩17点、玉髄質珪質頁岩2点、玉髄6点である

I類 無茎のもの

- a. 凹基のもの 2点。(1、2)
- b. 平基のもの 1点。
- c. 円基のもの 3点。(3)

II類 有茎のもの

- a. 平基のもの 10点。7は、基部にアスファルトの付着が見られる。(4～7)
- b. 凸基のもの 9点。(8～10)

石槍 (第41図11) 1点。石質は珪質頁岩である。

石錐 (第41図12) 1点。石質は珪質頁岩である。小さめのつまみ部を有する。

石匙 (第41図13～19) 13点。石質は、珪質頁岩12点、砂岩1点である。いずれのものも、刃部のほぼ片面のみに調整が施されている。

I類 縦型のもの 5点。(14、15、17)

II類 横型のもの 5点。つまみ部は、いずれも左右どちらかにやや片寄っている。
(13、16、18、19)

III類 折損のため細分不可能なもの 3点。

石鏡 (第42図20～28) 12点。石質は、珪質頁岩10点、玉髄質珪質頁岩2点である。23を除いて、刃部の両面に調整が施されている。

I類 撥形のもの 2点。(20、21)

II類 三角形のもの 1点。

III類 台形のもの 3点。22は両端に刃部を作出している。(22、25)

IV類 楕円形のもの 6点。(23、24、26～28)

不定形石器（第42図29～第43図44） 89点。石質は、珪質頁岩76点、玉髓質珪質頁岩4点、玉髓1点、黒曜石3点、流紋岩4点、砂岩1点である。

I類 定型的な刃部を持つもの（スクレイパー類） 70点。36、38、41、42、43の5点は、刃部の調整が両面に及ぶ。（29～44）

II類 定型的な刃部を持たないもの（R-フレイク） 6点。

III類 使用のため生じた微細剝離のあるもの（U-フレイク） 13点。

磨製石斧（第44図45～52） 13点。石質は、閃緑岩4点、緑色細粒凝灰岩2点、砂岩1点、輝緑岩2点、粘板岩1点、不明3点である。大半が折損した状態で出土している。

I類 断面が楕円形のもの 5点。（45、46）

II類 断面が扁平なもの 5点。47は片側の側縁部に擦切痕が明瞭に残る。（47～50）

III類 全体が小型のもの 2点。（51、52）

IV類 折損のため細分不可能なもの 1点。

打製石斧（第44図53） 1点。石質は輝緑岩である。刃部に若干の潰れが見られる。

刃部打製の石器（第44図54） 2点。石質は頁岩とチャートである。片方の先端に刃部を形成し、使用している。

敲磨器類（第45図55～第48図79） 53点。石質は、安山岩35点、流紋岩8点、凝灰岩4点、閃緑岩4点、輝緑岩1点、頁岩1点である。

I類 磨痕のあるもの 24点。55と59の側縁部付近の凹みは、使用の際の指による摩滅と思われる。（55～61）

II類 敲打痕のもの 16点。66は側縁部の短軸線上に1箇所ずつ敲打痕を持つ。（62～69）

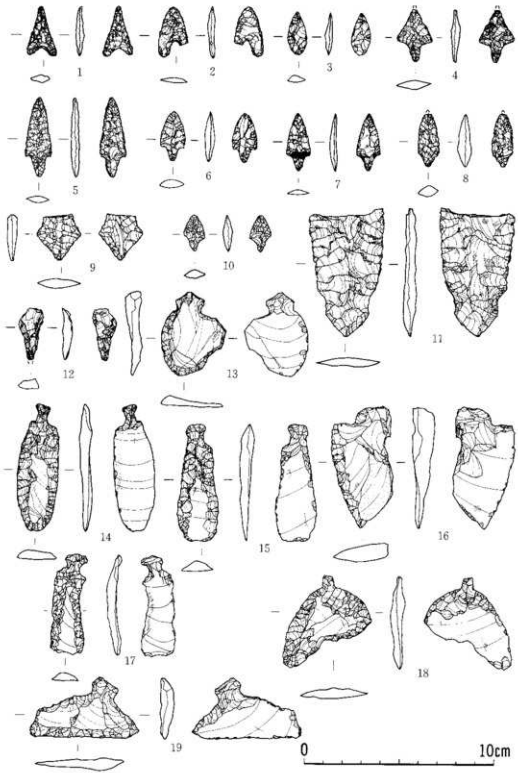
III類 くぼみ（凹）のあるもの 6点。70～72は2面、73は3面使用している。（70～73）

IV類 I類～III類の複合したもの 7点。すべて磨痕を有する。（74～79）

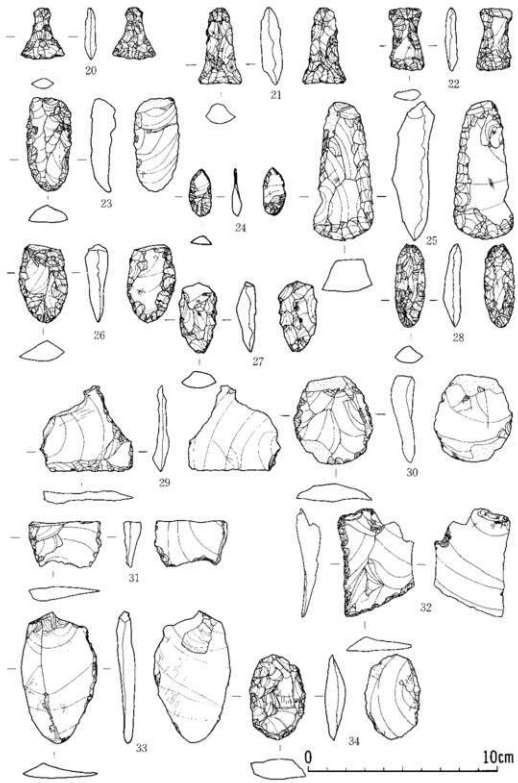
石皿（第48図80～82） 3点。石質は、安山岩2点、流紋岩1点である。完形品はない。80と81は、磨りにより使用面が湾曲し、82は使用により磨痕を片面に有する。

石錘（第48図83） 1点。石質は安山岩である。短軸線上に袂りを作出している。

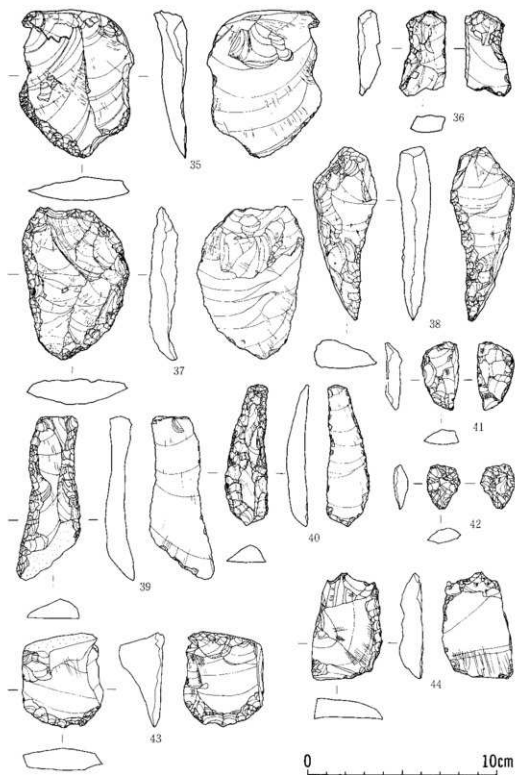
（相澤 治）



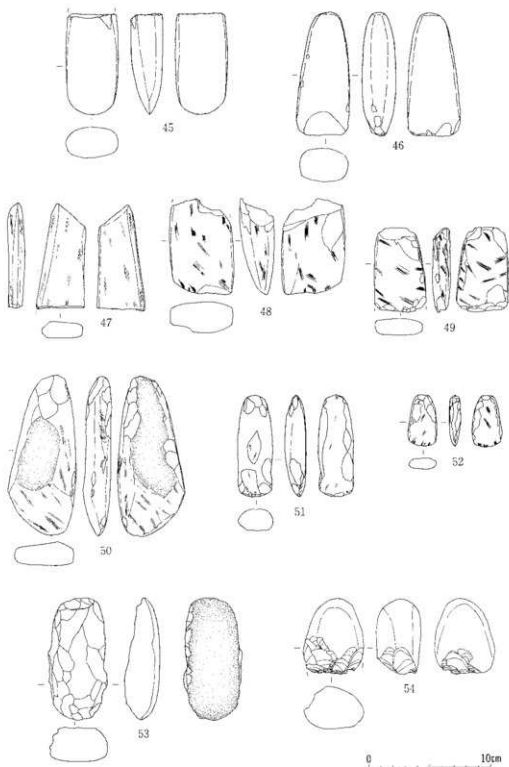
第41圖 遺構外出土遺物(石器 1)



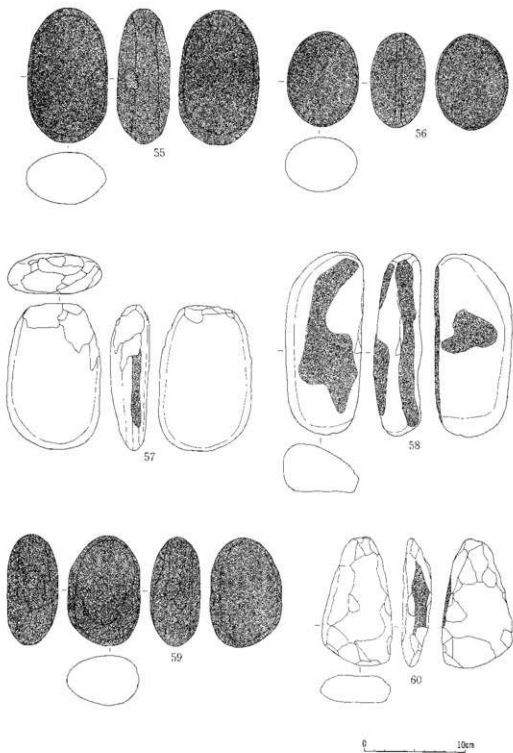
第42图 造構外出土遺物(石器 2)



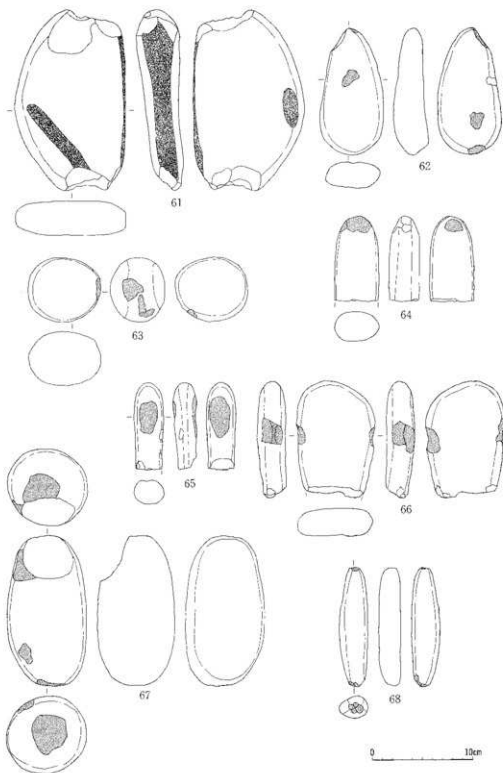
第43圖 通構外出土遺物（石器 3）



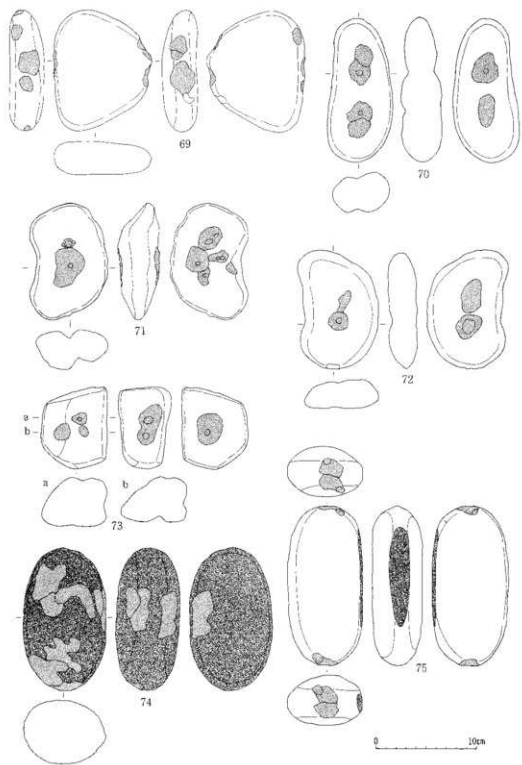
第44图 遗構外出土遺物(石器 4)



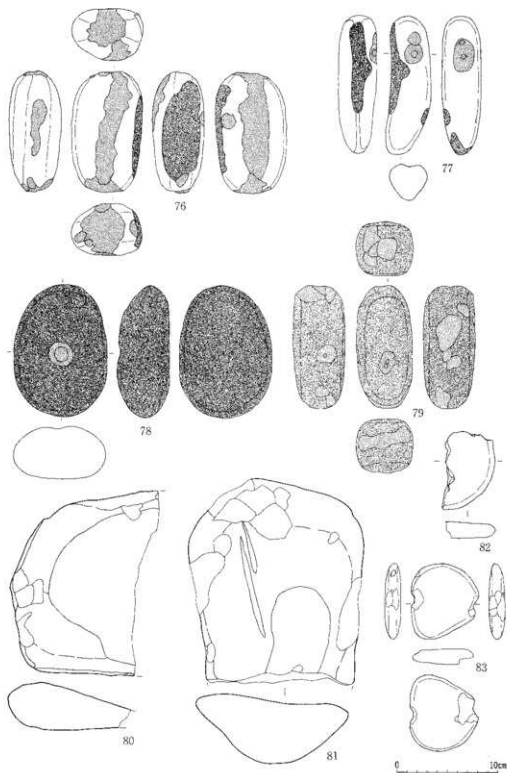
第45図 遺構外出土遺物(石器 5)



第46图 造橋外出土遺物（石器 6）



第47图 遺構外出土遺物(石器 7)



第48図 遺構外出土遺物(石器 8)

遺構外出土石器計測表(1)

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				材質	分類	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
41図-1	B・D-25	I・II	石鏃	22.0	15.5	4.0	1.0	玉髓	I-a	
41図-2	B・D-30	II	石鏃	22.0	15.0	3.0	(1.0)	珪	I-a	基部一部折損
41図-3	B・D-17	I・II	石鏃	22.0	10.0	4.0	0.8	珪	I-c	
41図-4	A	表採	石鏃	(27.0)	19.0	5.0	(1.4)	珪	II-a	先端部一部折損
41図-5	B・C-25	III	石鏃	42.0	14.0	4.5	1.7	珪	II-a	
41図-6	B・B-25	III	石鏃	26.0	13.0	5.5	1.4	玉珪	II-a	
41図-7	B・D-25	III	石鏃	31.0	12.0	4.0	0.9	珪	II-a	基部にアスファルト付着
41図-8	B・C-10	II	石鏃	(27.0)	11.0	7.0	(1.7)	玉珪	II-b	先端部一部折損
41図-9	B・D-30	III	石鏃	(23.0)	23.0	4.5	(2.1)	珪	II-b	基部付近のみ残存
41図-10	B・D-30	II	石鏃	20.0	11.0	5.0	0.8	玉珪	II-b	
41図-11	B・D-25	III	石鏃	(64.0)	39.0	7.0	(17.3)	珪		基部折損
41図-12	A・B-65	III	石鏃	(27.0)	11.0	5.0	(1.6)	珪		先端部折損
41図-13	B・C-28	III	石鏃	44.0	33.0	9.0	7.1	珪	II	
41図-14	B		石鏃	67.0	22.0	7.0	8.6	珪	I	
41図-15	B・C-22	I・II	石鏃	62.0	22.0	7.0	7.9	珪	I	
41図-16	A・C-63	II	石鏃	61.0	30.0	11.0	22.7	珪	II	
41図-17	B・F-24	I・II	石鏃	54.0	18.0	4.0	5.1	珪	I	
41図-18	A・B-65	II	石鏃	34.0	42.0	7.0	9.9	珪	II	
41図-19	A・C-51	II	石鏃	32.0	57.0	7.0	9.8	珪	II	
42図-20	A・E-53	II	石鏃	27.0	21.0	6.0	2.6	玉珪	I	
42図-21	A・E-53	II	石鏃	40.0	23.0	11.0	7.4	珪	I	
42図-22	A・E-53	II	石鏃	32.0	18.0	6.5	4.3	珪	III	両端に刃部作出
42図-23	B・D-19	I・II	石鏃	48.0	23.0	14.0	13.1	珪	IV	
42図-24	B・B-11	III	石鏃	25.0	12.0	5.5	1.1	玉珪	IV	
42図-25	B・B-25	I・II	石鏃	73.0	31.0	20.0	42.9	珪	III	
42図-26	B	表採	石鏃	40.0	25.0	13.0	11.1	珪	IV	
42図-27	B・C-19	I・II	石鏃	37.0	20.0	11.0	7.2	珪	IV	
42図-28	B・B-26	I・II	石鏃	41.0	16.0	10.0	6.9	珪	IV	
42図-29	A・E-55	II	不定形	45.5	49.0	7.0	11.9	珪	I	
42図-30	B・D-24	I・II	不定形	47.0	40.0	12.0	18.1	珪	I	
42図-31	B・D-17	I・II	不定形	25.0	38.0	9.0	8.1	珪	I	
42図-32	B・E-30	III	不定形	58.5	40.5	12.5	15.7	珪	I	
42図-33	B・D-19	I・II	不定形	70.0	40.0	9.0	20.8	珪	I	
42図-34	A・E-56	II	不定形	45.0	29.0	11.0	14.1	珪	I	
43図-35	B・D-24	III	不定形	77.0	56.0	13.9	61.5	珪	I	
43図-36	B・D-5	I・II	不定形	41.0	23.0	11.0	13.2	珪	I	両面調整
43図-37	B・C-1	I・II	不定形	82.0	54.0	15.0	64.2	珪	I	
43図-38	A・D-52	II	不定形	81.0	33.0	17.0	43.5	珪	I	両面調整
43図-39	A・B-66	I	不定形	86.0	27.0	11.0	27.4	珪	I	
43図-40	B・C-29	III	不定形	75.0	22.0	11.0	14.2	珪	I	
43図-41	B・E-27	I・II	不定形	37.0	20.0	10.0	6.0	珪	I	両面調整
43図-42	B・B-24	III	不定形	24.0	17.5	8.0	3.1	玉珪	I	両面調整
43図-43	B・B-20	I・II	不定形	48.0	42.0	23.0	44.0	珪	I	両面調整
43図-44	B・B-25	I・II	不定形	36.0	55.0	12.0	29.9	珪	I	
44図-45	B・C-19	I・II	磨石	(83.0)	43.0	27.0	(161)	閃緑	I	基部折損

遺構外出土石器計測表(2)

図版番号	出土地点	層	器種	最大計測値				石質	分類	備考
				長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
44図-46	B・D-26	I・II	磨斧	(101)	44.0	29.0	(201)	閃緑	I	刃部折損
44図-47	A・B-59	II	磨斧	(87.0)	39.0	14.0	(85.2)	緑輝	II	磨入念、擦切痕
44図-48	A・E-53	III	磨斧	(79.0)	53.0	28.0	(172)	緑輝	II	磨入念、基部折損
44図-49	B・D-28	III	磨斧	69.0	43.0	16.0	73.3	緑輝	II	磨入念
44図-50	A・B-65	III	磨斧	133.0	56.0	24.0	227.8	砂	II	
44図-51	B・C-30	II・III	磨斧	84.0	29.0	18.0	69.2	閃緑	III	
44図-52	B・C-20	III	磨斧	41.0	25.0	19.0	17.3	輝緑	III	磨入念
44図-53	B・C-28	III	打斧	102.0	49.0	30.0	194.3	輝緑		
44図-54	B・D-17	I・II		62.0	51.0	35.0	142.0	頁		先端に刃部作出
45図-55	B・E-27	I・II	敲剥	135.0	79.0	52.0	846.0	安	I	全面使用、指当て痕?
45図-56	A・C-62	II	敲剥	96.0	72.0	55.0	519.6	安	I	全面使用
45図-57	B・D-22	I・II	敲剥	146.0	93.0	39.0	769.0	安	I	
45図-58	B・B-22	I・II	敲剥	185.0	80.0	51.0	1106	安	I	
45図-59	A・C-52	II	敲剥	111.0	72.0	50.0	582.0	安	I	全面使用、指当て痕?
45図-60	B・E-28	I・II	敲剥	130.0	70.0	28.0	314.0	安	I	石斧から転用?
46図-61	B・E-32	II・III	敲剥	180.0	112.0	43.0	1068	安	I	
46図-62	A・B-60	I	敲剥	124.0	64.0	35.0	332.2	安	II	
46図-63	B・D-31	III	敲剥	65.0	72.0	54.0	359.0	流	II	
46図-64	B・C-25	I・II	敲剥	(85.0)	46.0	30.0	(173)	流	II	折損品
46図-65	A・D-68	I	敲剥	(68.0)	39.0	27.0	(77.0)	頁	II	折損品、両面敲打
46図-66	B・E-26	III	敲剥	(118)	80.0	27.0	(385)	流	II	両側縁部1点ずつ敲打
46図-67	B・C-30	III	敲剥	152.0	89.0	77.0	1800	閃緑	II	
46図-68	A・C-64	II	敲剥	120.0	30.0	23.0	112.0	安	II	
47図-69	B・D-11	I・II	敲剥	119.0	97.0	34.0	546.0	安	II	三角形、各頂点を敲打
47図-70	A・C-24	II	敲剥	143.0	66.0	40.0	545.0	凝	III	2面使用
47図-71	B・E-26	III	敲剥	113.0	89.0	41.0	389.0	安	III	2面使用
47図-72	B・C-22	III	敲剥	125.0	81.0	30.0	409.8	安	III	2面使用
47図-73	B・B-30	III	敲剥	88.0	68.0	53.0	352.1	安	III	3面使用
47図-74	B・B-29	III	敲剥	143.0	83.0	64.0	1112	閃緑	IV	磨痕+敲打痕
47図-75	B・E-25	III	敲剥	164.0	75.0	50.0	992.0	安	IV	磨痕+敲打痕
48図-76	B・D-31	I・II	敲剥	122.0	71.0	54.0	712.0	輝緑	IV	磨痕+敲打痕
48図-77	B・C-30	III	敲剥	137.0	45.0	39.0	291.0	安	IV	磨痕+くぼみ(凹)
48図-78	B・D-10	III	敲剥	133.0	93.0	53.0	1006	安	IV	磨痕+くぼみ(凹)
48図-79	B・C-31	III	敲剥	124.0	56.0	53.0	480.0	安	IV	磨痕+敲打痕+くぼみ
48図-80	B・D-27	I・II	石皿	(187)	148.0	49.0	(3600)	流		折損品
48図-81	A・C-52	II	石皿	(290)	177.0	67.0	(3750)	安		折損品、線刻2本
48図-82	B・D-27	I・II	石皿	(79.0)	(54.0)	17.0	(94.8)	安		破片
48図-83	A・E-63	II	石鉢	68.0	76.0	16.0	113.0	安		短軸線上に抉り作出

(3) 土製品・石製品 (第49図)

本遺跡の遺構外から出土した土製品は、鐮形土製品1点、円盤状土製品1点、名称・用途不明のもの1点、土鍾1点、石製品は小玉1点である。これらを一括して、観察表にまとめた。

土製品・石製品観察表

図版番号	出土地点	層位	製品名	大きさ(mm)	重さ(g)	備 考
49図-1	B・C-30	—	鐮形 土製品	25×27×9-17	7.5	断面破片、頂部から7～8mm下に貫通孔、3つの側面ごとに2～3列の刺突による列点、縄文時代後期
49図-2	B・B-25	Ⅱ	円盤状 土製品	40×35×9	16.8	ほぼ完形品、表面の摩滅ひどく、文様の有無と土器片の再利用か否かは不明、縄文時代
49図-3	B・D-30	Ⅱ	?	33×29×22	15.9	頂部から当腹側に渦巻状に沈線、1面の下部横ナゲ円筒土層。式土器の突起の可能性大、縄文時代中期
49図-4	B・D-27	Ⅱ	土 鍾	31×28×60	49.5	完形品、管状土鍾、表面の一部にスス状の炭化物深く付着（焼成時のものか）、時期不明
49図-5	A・C-65	Ⅱ	小 玉	12.5×12×12	3.2	完形品、石質は鮎紋岩質の礫岩、厚径5mm×4mm、縄文時代

(4) 陶磁器・その他の遺物 (第49図～第50図)

平成4年度と5年度の調査でダンボール箱約1箱分ずつ、計2箱分ほどの陶磁器が出土している。B区第2号溝跡覆土出土の1片を除き、遺構外からの出土である。时期的には、中世のものから昭和のものに至るまで、幅広く見られる。

これらの中で主体を占めるのは、江戸時代に肥前で製作されたと思われる陶磁器である。

また、寺田徳徳氏のお話によると、調査区域付近は、戦前～戦中の食糧増産のために畑地として広範囲にわたって開墾が進められたということである。近・現代のものと思われる多くの陶磁器は、その際に持ち込まれたものと考えられる。

その他、これらの陶磁器と時期をそれほど隔てないものと思われる遺物（古銭、土人形）も含め、主な遺物の観察結果を表にまとめた。なお、ここでは、明治以前のものまでに限り、観察の対象とした。また、陶磁器の観察表に記した年代観については大橋康二氏による肥前陶磁の年代区分（大橋1989）を基にした。

(相澤 治)

陶磁器観察表

図版番号	出土地点	層位	産地	名称	器形	生産年代	特 徴
49図-6	A・D-40	Ⅱ	肥 前	染 付	瓶	1650～1690	内面無地、焼成不良
49図-7	—	—	肥 前	染 付	鉢か皿	1690～1780	外面唐草文
49図-8	A・E-47	I	肥 前	染 付	碗	1690～1780	高台内「大明平製」銘、焼成不良
49図-9	B・B-9	I・Ⅱ	肥 前	染 付	皿	1690～1860	

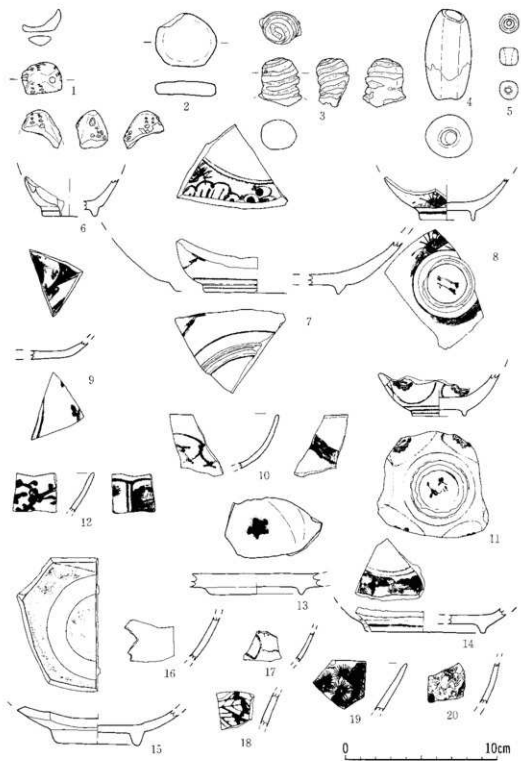
図版番号	出土地点	層位	産地	名称	器形	生産年代	特 徴
49図-10	A・D-40	I	肥前	染付 皿	皿	1690-1780	外面唐草文、焼成不良
49図-11	A・E-47	I	肥前	染付 碗	碗	1690-1780	高台内「人明年製」銘、波差見系か
49図-12	B・D-14	I・II	肥前	染付 振打皿	振打皿	1780-1860	外面唐草文(線描)
49図-13	A・C-14	II	肥前	染付 皿	皿	1690-1780	見込コンニャク印刷五弁花文、波差見系か
49図-14	B・R-19	I・II	肥前	染付 皿	皿	1690-1780	波差見系か
49図-15	A・E-63	II	肥前	陶器 皿	皿	1690-1780	見込銘の目録ハズ、灰釉、高台内無釉、内野山窯か
49図-16	B・R-25	I・II	中国	青磁 碗	碗	14-15世紀	
49図-17	A・D-53	II	肥前?	京焼風 碗	碗	?	
49図-18	B・D-15	I・II	?	?	?	?	
49図-19	B・D-20	I・II	瀬戸?	染付 碗	碗	明治	銅板印刷
49図-20	A・C-41	II	?	染付 碗	碗	明治	七福神の文様、銅板印刷か印刷染付
50図-21	A・B-25	II	?	染付 小皿	小皿	明治	程野染付
50図-22	A・D-29	II	肥前	陶器 皿	皿	1630-1690	外面白化粧土、内面白化粧土による波状の駒毛目
50図-23	B・C-17	I・II	肥前	陶器 鉢	鉢	1690-1630	武部園紅糸切痕、内面灰釉と砂目
50図-24	B・D-6	I・II	肥前	陶器 鉢	鉢	1650-1780	内面白化粧土による駒毛目
50図-25	B・E-23	I・II	肥前	陶器 不明	不明	1650-1780	内面鉄塗り、外面白化粧土と鉄釉
50図-26	A・E-67	II	?	瓦器質 摺鉢か	摺鉢か	近世以降?	内外面無釉、内面に砂目?
50図-27	A・D-54	II	肥前	陶器 鉢	鉢	1650-1780	内外面白化粧土、内面沈源と亀甲文
50図-28	B・B-21	I・II	中国?	陶器 香炉か	香炉か	?	梅香炉か?
50図-29	B・C-32	I・II	瀬戸?	陶器 摺鉢	摺鉢	17世紀	内外面鉄塗り、内面砂目
50図-30	B・D 11	I・II	東北系?	陶器 磁か板	磁か板	?	外面白滑釉、内面鉄釉
50図-31	B・D-11	I・II	東北系?	陶器 磁か	磁か	?	内外面白釉
50図-32	A・E-47	I	大塚相馬	陶器 土板	土板	19世紀	内面白自然釉、32と同一個体
50図-33	A・D-40	II	大塚相馬	陶器 土板	土板	19世紀	内面白自然釉、32と同一個体の底部付近

その他の遺物観察表(1)

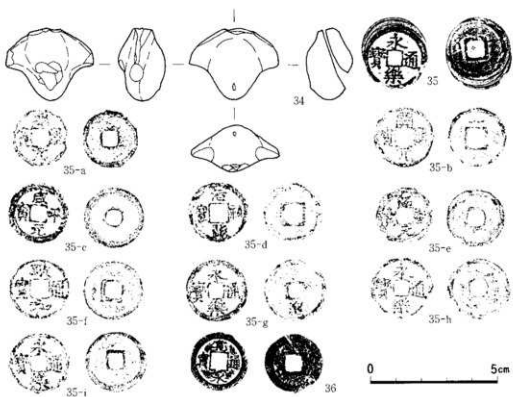
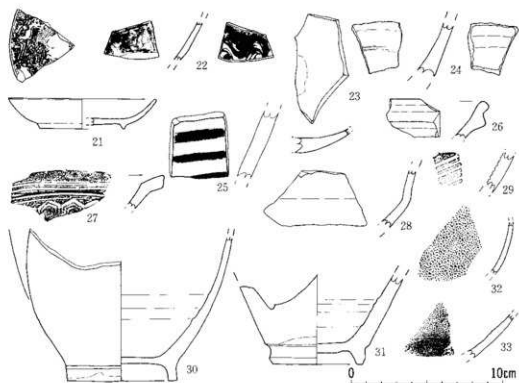
図版番号	出土地点	層位	製品名	大きさ(mm)	重さ(g)	備 考
50図-34	A・B-65	II	土人形	29×35×19	10.2	女性の頭部、後頭部に志を通すための穴、一部赤彩、江戸時代以降のものか
50図-35	A・B-72	I	永楽通寶 その他9枚 (全体の厚さ)	25×25×10 (全体の厚さ)	23.9 (全体)	永楽通寶等6種9枚の摺鉢(表2)、通し紐わずかに残存、「寛永通寶」書及前の中・近世?
50図-36	B・D 23	I	寛永通寶	23.5×23.5×1	2.2	江戸時代

その他の遺物観察表(2) 50図-35 (永楽通寶ほか6種9枚)の内訳

図版番号	銭種	初鋳年代	字体	読み方	直径(cm)	厚径(cm)	外輪幅(cm)	内輪幅(cm)	重さ(g)	背文	備考
50図35a	開元通寶	唐 621	真書	対流	2.30	0.61	0.15	0.10	2.0		脆い
50図35b	*	*	*	*	2.40	0.70	0.17	0.07	2.1		甲文
50図35c	咸平元寶	宋 998	真書	翻読	2.45	0.60	0.30	0.10	3.0		
50図35d	元祐通寶	宋 1,086	篆書	翻読	2.40	0.70	0.20	0.10	2.8		
50図35e	紹聖元寶	宋 1,094	真書	翻読	2.30	0.65	0.20	0.08	2.7		
50図35f	政和通寶	宋 1,111	真書	対流	2.45	0.70	0.15	0.10	2.7		
50図35g	永樂通寶	明 1,408	真書	対流	2.45	0.55	0.15	0.10	2.8		
50図35h	*	*	*	*	2.50	0.55	0.15	0.10	2.6		
50図35i	*	*	*	*	2.45	0.60	0.15	0.11	3.0		



第49图 遺構外出土遺物(土製品・石製品、陶磁器 1)



第50図 遺構外出土遺物（陶磁器 2・その他の遺物）

第V章 ま と め

平成4年度及び平成5年度に実施した高野川(3)遺跡の発掘調査の結果、以下の成果を得た。

検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑6基、土器埋設遺構1基、屋外炉1基、石組炉1基、焼土遺構4基、溝跡3条である。すべて、平成5年度の調査区域（B区）より検出されたものであり、平成4年度の調査区域（A区）からの遺構の検出はなかった。

竪穴住居跡はその遺物の出土状態から、縄文時代後期（十腰内Ⅲ式）に構築し、廃棄されたものと思われる。土器埋設遺構と5基のフラスコ状ピットも、ほぼ同時期のものとみられる。

これらの遺構は、B区5～12グリッドの平坦部と緩斜面上にまとまって配置されている。

第5号土坑については、縄文時代後期初頭（牛ヶ沢(3)遺跡第Ⅲ群）の土器が出土しており、前述の遺構よりも古い時期のものと考えられる。

屋外炉と石組炉は、およそ縄文時代中～後期の範囲におさまるものと思われる。

焼土遺構の時期は特定し得ないが、溝跡は近・現代に構築された可能性が高い。

出土した遺物は、縄文時代早期～晩期の土器・石器・土製品・石製品、弥生時代の土器、中世～現代の陶磁器、古銭、土人形など、段ボール箱合計27箱分である（平成4年度3箱・平成5年度24箱）。大半は遺構に伴わない、遺構外出土の遺物である。

これらの遺物の中でとくに多いものは、縄文時代後期の土器である。平成5年度の調査区域（B区）では十腰内Ⅰ式、対して平成4年度の調査区域（A区）では十腰内Ⅲ式の土器の占める割合が高い。これは、この2つの時期の人々の生活範囲の微妙な違いを示すものであろう。

また、B区28～32グリッドの、熊野川向きに傾斜するやや急な斜面に、弥生時代のものを含む多くの土器、石器の流れ込みが見られたが、捨て場というほどの規模ではなかった。

弥生土器の出土は、熊野川寄りに顕著で、A区では若干見られる程度であった。

出土した遺物から、本遺跡は、縄文時代早期から晩期までの各時期、弥生時代、中・近世から明治、大正、昭和に至るまでの複合遺跡であることがわかった。また、検出された遺構の状況から、縄文時代後期（十腰内Ⅲ式）には、熊野川南東岸の河岸段丘に沿って、段丘上の平坦部のやや標高が高い部分に集落が営まれていたと考えられる。さらに遺構外の土器出土状況から、調査区域の周辺には、十腰内Ⅰ式期の集落跡が存在する可能性が高いと思われる。

周辺の遺跡を見ると、熊野川を隔てて本遺跡の西に隣接する熊ヶ平遺跡（県埋文報第180集：1995刊行予定）は、縄文時代前期～中期初頭の大規模な集落跡と推定されているが、調査区

域の東端(熊野川・本遺跡寄り)の平坦部には、後期初頭(弥栄平(2)式)と思われる住居跡が検出されている。さらに本遺跡のすぐ北側に位置する隠里遺跡も後期の散布地とされており、この2つの遺跡と、縄文時代後期の本遺跡とが、何らかの関わりを持つ可能性が考えられる。

また、本遺跡から出土した中世の中国製青磁破片と古銭(唐銭、宋銭、明銭)に関しては、本遺跡の東側に位置し、15世紀後半の集落跡の一部と見られる高野川(2)遺跡(原埋文報第153集:1993)や、やや距離を置いて本遺跡の北西方向に所在し、中~近世にかけての城館や交易を理解する上で価値の高い資料を提供している鞍越遺跡(川内町教育委員会:1992)との関連も指摘できるであろう。

最後に、当地域の遺跡の全容を理解していく上で、本遺跡の発掘調査から得た成果がその一助となれば幸いである。

(相澤 治)

<引用・参考文献>

- | | | | |
|------------------|------|--|------------|
| 青森県教育委員会 | 1977 | 『近野遺跡遺跡発掘調査報告書(Ⅲ) 三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』 | 青埋文報第33集 |
| 青森県教育委員会 | 1978 | 『三内塚部遺跡発掘調査報告書』 | 青埋文報第41集 |
| 青森県教育委員会 | 1981 | 『新納屋遺跡(2)発掘調査報告書』 | 青埋文報第62集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『弥栄平遺跡(2)発掘調査報告書』 | 青埋文報第81集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『和野前山遺跡』 | 青埋文報第82集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『窪窪遺跡』 | 青埋文報第84集 |
| 青森県教育委員会 | 1984 | 『牛ヶ沢(3)遺跡発掘調査報告書』 | 青埋文報第86集 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 『大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書』 | 青埋文報第97集 |
| 青森県教育委員会 | 1986 | 『沖附(2)遺跡』 | 青埋文報第101集 |
| 青森県教育委員会 | 1987 | 『大石平遺跡Ⅲ発掘調査報告書』 | 青埋文報第103集 |
| 青森県教育委員会 | 1992 | 『富ノ沢(2)遺跡Ⅴ』 | 青埋文報第143集 |
| 青森県教育委員会 | 1993 | 『野籠遺跡』 | 青埋文報第149集 |
| 青森県教育委員会 | 1993 | 『高野川(2)遺跡』 | 青埋文報第153集 |
| 青森県教育委員会 | 1995 | 『熊ヶ平遺跡・板子塚遺跡』(刊行予定) | 青埋文報第180集 |
| 青森市堂沢遺跡
発掘調査団 | 1979 | 『堂沢遺跡』 | |
| 青森市教育委員会 | 1991 | 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書 一市内出土の古銭一』 | 青森市埋文報第17集 |
| 八戸市教育委員会 | 1988 | 『田面木平遺跡(1)』 | 八戸市埋文報第20集 |
| 川内町教育委員会 | 1981 | 『川代・邪馬尻遺跡発掘調査報告書』 | |
| 川内町教育委員会 | 1991 | 『戸沢川代遺跡発掘調査報告書』 | |
| 川内町教育委員会 | 1992 | 『鞍越・巖川遺跡発掘調査報告書』 | |
| 川内町教育委員会 | 1993 | 『川内町埋蔵文化財発掘調査報告書 田沢沢(2)遺跡・戸沢川代遺跡・戸沢(1)遺跡・鞍越遺跡』 | |
| 村 越 潔 | 1974 | 『円筒土器文化』雄山閣 | |
| 大 橋 康 二 | 1989 | 『肥前陶磁』考古学ライブラリー-55 ニューサイエンス社 | |
| 磯崎正彦・今井富士夫 | 1968 | 『十勝内遺跡』『岩木山』岩木山刊行会 | |
| 須 藤 隆 | 1970 | 『青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について』 | |
| | | 『考古学雑誌 第56巻第2号』 | |
| 本 間 宏 | 1987 | 『縄文時代後期初頭土器群の研究(1)』『よねしろ考古』第3号 | |



平成4年度発掘調査区域（A区）遠景（南→）



平成4年度発掘調査区域（A区）近景（北→）



平成5年度発掘調査区域（B区）近景（南東→）



基本層序（B区23ライン）



第1号住居跡完掘



第1号住居跡土器出土状況(1)



第1号住居跡土器出土状況(2)



第1号住居跡石器出土状況

写真1 調査区域基本層序 遺構(1)



第1号土坑及び第6号土坑完掘



第2号土坑完掘



第5号土坑遺物出土状況



第1号土器埋設遺構



第1号土器外壁



第1号石組炉



第1号溝跡完掘



第2号溝跡完掘

写真2 遺構(2)

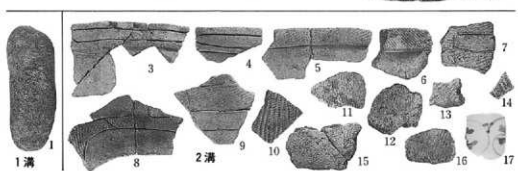
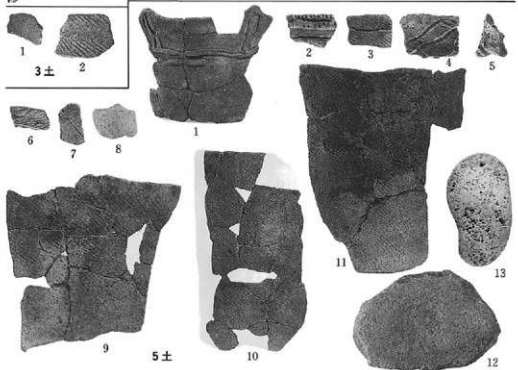
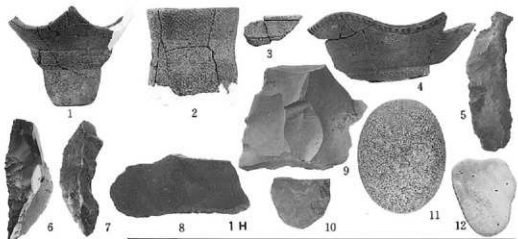


写真3 遺構内出土遺物



1
(埋設土器)



2
(埋設土器)

第1号土器埋設遺構

第1号屋外炉

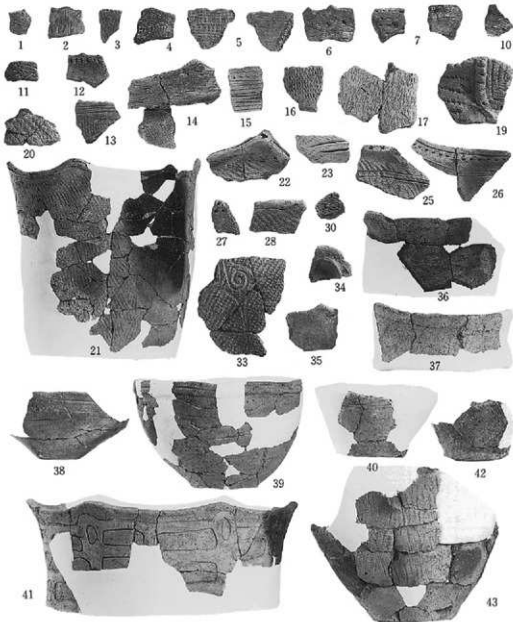


写真4 埋設土器・遺構外出土遺物(土器1)

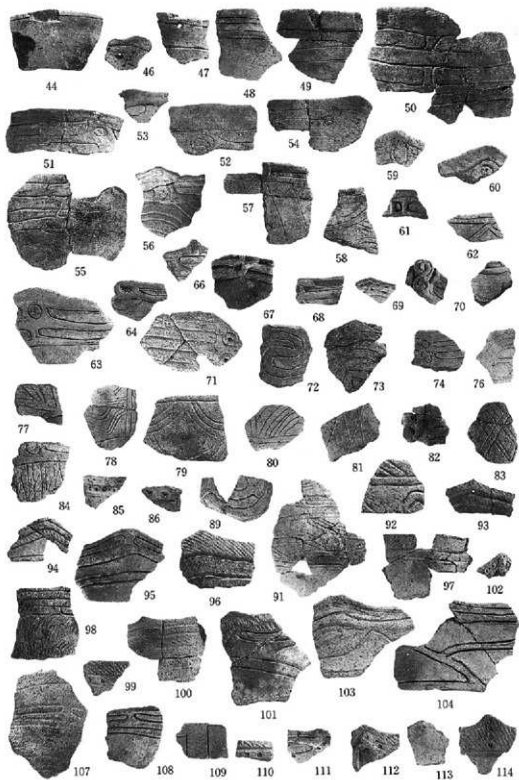


写真5 遺構外出土遺物(土器2)

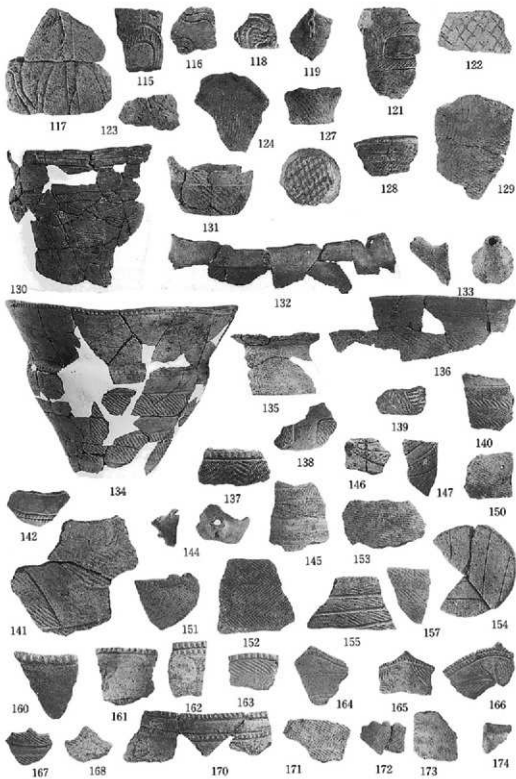


写真6 遺構外出土遺物(土器3)

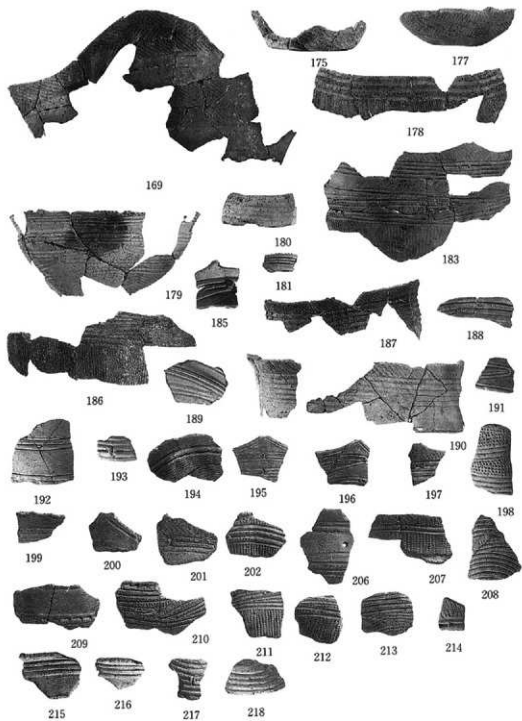


写真7 遺構外出土遺物(土器4)

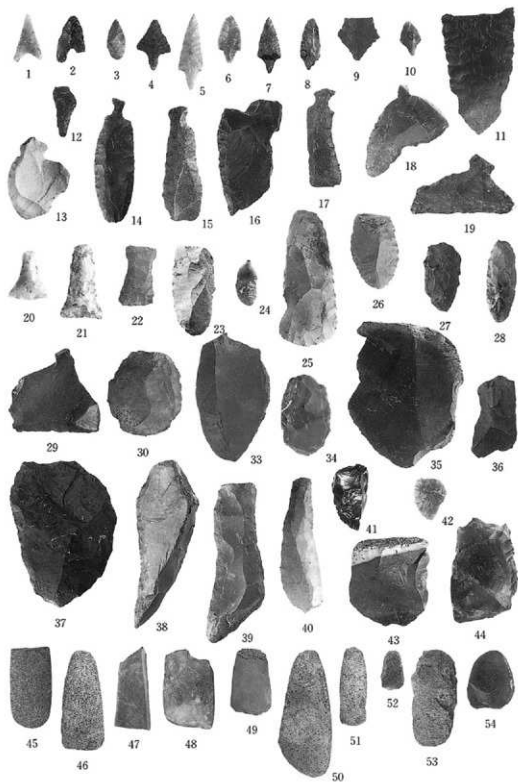


写真8 遺構外出土遺物(石器1)

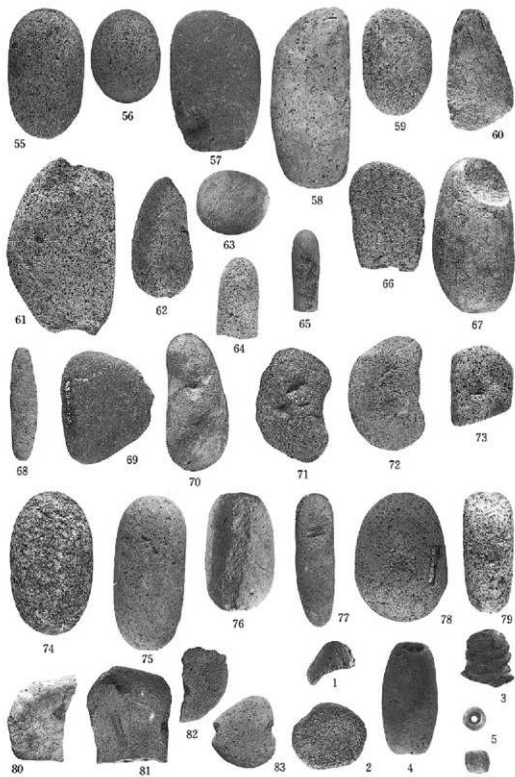


写真9 遺構外出土遺物 (石器2・土製品・石製品)

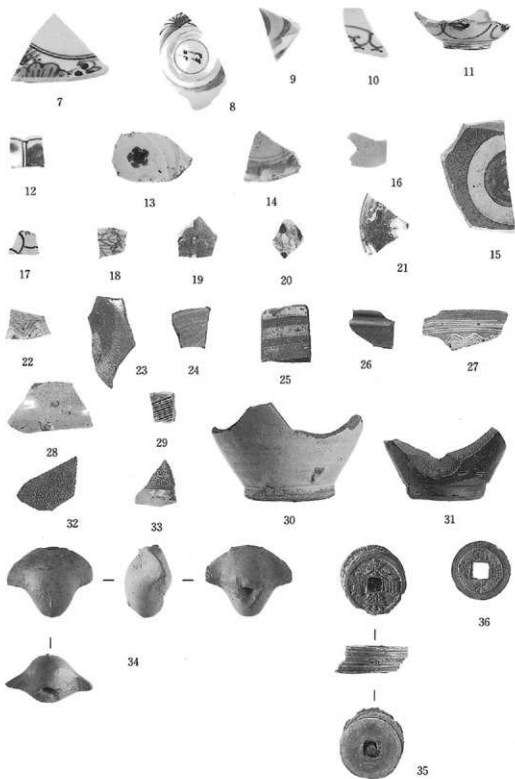


写真10 遺構外出土遺物 (陶磁器・その他の遺物)

報告書抄録

ふりがな	こうやがわ(3)いせき							
書名	高野川(3)遺跡							
副書名	景観農免農道整備事業(高野川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第179集							
編者者名	北林 八洲晴、新岡 敏、相澤 治							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038 青森市大字新城市天田内152-15 TEL 0177-88-5701							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	°	調査期間	調査面積	
高野川(3)	青森県下北郡川内町 大字川内字高野川 71、外	02-421	51029	41度 11分 54秒	141度 1分 6秒	19920601~ 19921120 19930818~ 19931118	3,400 2,500 ㎡	県営農免農 道整備事業 に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高野川(3)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 1軒	縄文土器(深鉢・鉢・台 付鉢・壺・注口)		・後期(1層内Ⅰ式)の 住居跡が検出されたた め集落跡の一部と考え られる。 ・土器は早期から晩期 まで幅広く出土している が主体をなすのは後期 の1層内Ⅰ式とⅡ式で ある。両者の散布する 範囲はやや異なる。		
			土坑 6基	石器(石鏃・石槍・石 匙・石泡・石錘・不定形 石器・磨製石斧・打製石 斧・石錘・敲磨器その 他)				
			土器埋設遺構 1基	土製品(蹄形土製品・円 盤状土製品・名称、用途 不明) 石製品(小玉)				
			屋外炉 1基					
			弥生時代		弥生土器(鉢・浅鉢・台 付鉢・甕・壺・高坏)		・すべて前期の土器。主に 龍野川寄りから出土。	
		中世・近世		陶磁器(青磁・染付・京 焼風・陶器・磁器)		・近世の肥前の陶磁器が 主体をなす。		
		明治～昭和		銭貨(関元通貨・咸平元 寶・元祐通貨・紹聖元 寶・政和通貨・永樂通 寶・寛永通貨)		・14～15世紀の中国の青 磁が1片出土。 ・唐銭、宋銭、明銭が6 種9枚の箱状で出土。		
		時代不詳	溝跡 3条 焼土遺構 4基	土鐘		・溝は開鑿の際、構築?		

青森県埋蔵文化財調査報告書 第179集

高野川(3)遺跡発掘調査報告書

—県営農免農道整備事業（高野川地区）に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成 7 年 3 月 31 日

発 行 青 森 県 教 育 委 員 会

〒030 青森市新町二丁目3-1

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038 青森市新城字天田内152-15

TEL.0177-88-5701 FAX.0177-88-5702

印 刷 東 北 印 刷 工 業 株 式 有 限 公 司

〒030 青森市合浦一丁目2番12号

TEL.0177-42-2221 FAX.0177-65-1115

